拾遺愚草　下　　部類哥

春

建久五年夏左大将家哥合　題名所

春二首之中　志賀浦

こほりとくほるのほつかせたらぬらし霞にかへるしかのうら波　二〇二六

建仁元年正月七日院に年始哥講とられ侍し日　初春祝

春ことのかものはいろのこまなれとけふをそひかむちよのためしに　二〇二七

松間鶯

まつの葉もほるほわけとやゆふつく日さすやをかへにきゐるうくひす　二〇二八

朝若菜

霞たゝこのめはるさめきのふまてふるのゝわかなけさはつみてむ　二〇二九

承久元年七月内裏哥合十首之内

野径霞

かすか野ゝかすみの衣山かせにしのふもちすりみたれてそゆく　二〇三〇

正治二年九月院初度哥合若草十首之内

うちなひきほるのみそらもみとりにて風にしらるゝ野辺のわかくさ　二〇三一

雪間若菜といふことを

いつしかとゝふひのわかな打むれてつめともいまた雪もけなくに　二〇三二

老後閑居つれつれのあまりとふらひまうてきたる人くの哥よみ侍しに初聞鶯

あらたまのとしのはつこゑ打はふきあさけのそらにきゐる鶯　二〇三三

霞中梅

とひこかしたらえは梅の見えすとも匂ひをこめてたつ霞かは　二〇三四

湖辺梅花

けふそとふしかつのあまのすむ里を鶯さそふ花のしるへに　二〇三五

旅宿早春

枕とて草のはつかにむすへとも夢もみしかき春のうたゝね　二〇三六

三宮より十五首哥めされし春哥中

あすかゝはとをき梅かえにほふ夜はいたつらにやは春風の吹　二〇三七

建保四年閏六月内裏哥合春哥十首之中

しるしらすわさてはまたす梅花にほふほるへのあけら夜の月　二〇三八

上御門内大臣家哥合　密有臨幸　春題

六首之中　梅香留袖

梅花ありとや袖のにほひゆへやとにとまるは鶯のこゑ　二〇三九

翠柳誰家

うちなひきほるのやとりやこれならむそともの柳ぬしはしらねと　二〇四〇

内裏哥合に水辺柳

ほるの日に岸のあをやきうちなひきなかき世笑るたきのしらいと　二〇四一

同題　家会

そめかくる花たのいとのたま柳したゆく水もひかりそへつゝ　二〇四二

江上霞　内裏哥合

ほるかすみかすめるそらのなにはえに心ある人や心見ゆらむ　二〇四三

建保二年二月内裏詩哥合　野外霞

続拾

たちなるゝとふひのゝもりをのれさへ霞にたとるほちのあけほの　二〇四四

松の雪きえぬやいつこほるの色にみやこのゝへほかすみゆくころ　二〇四五

建仁元年三月尽日哥合霞隔遠樹

続石みつしほにかくれぬいそのまつのはに見らくすくなくかすむ春哉

羇中見花

かり衣たちうき花のかげにさてゆく末くらすほるのたびゝと　二〇四七

内裏詩哥合　山居春曙　二首之中

と山とてよそにも見えし春のさら衣かたしきねてのあさけは　二〇四八

内裏哥合　夜帰鴈

つれもなくかすめる月のふかさよに数さへ見えすかへるかりかね　二〇四九

海辺帰鴈

さとのあまのしほやき衣たちわかれなれしもしらぬほるのかりかね　二〇五〇

賀茂社哥合　御幸日暁帰鴈

花のかもかすみてしたふありあけをつれなく見えてかへるかりかね　二〇五一

暮山花

たか春のくものなかめにくれぬらむやとかる花の峯のこのもと　二〇五二

摂政殿にて哥を詩にあはせられしとておなし題を二首よませられし　詩哥合とかやの初也此後連々有此事

花添山気色

春の花の雲のにほひにほつせ山かはらぬ色をそらにうつらふ　二〇五三

たますだれおなしみとりもたをやめのそむる衣にかほる春風　二〇五四

正治二年三月左大臣家哥合　暁霞

ほつせ山かたふく月もほのゝとかすみにもるゝかねのをとゝ哉　二〇五五

朝花

世のつねの雲とは見えす山桜けさや昔のゆめのおもかけ　二〇五六

建保三年五月哥合　和哥門　春山朝

このねぬるあさけの山の松風は霞をわけて花のかをする　二〇五七

建仁二年三月三軒とかやおほせられてめされし春哥

花さかり霞の衣ほころひてみね白たへのあまのかく山　二〇五八

秀能か人々によませ侍し五首之中花哥

おほかたのまかはぬくもゝかほるらむさくらの山の春の曙　二〇五九

三宮十五首之中

もゝちとりなくやさくらさつくゝとこのめはる雨ふりくらしつゝ　二〇六〇

みよしのはゝるのにほひにうつもれてかすみのひまも花をふりしく　二〇六一

建久五年夏　左大将家哥合　泊瀬山

かねのをとも花のかほりになりはてぬをほつせ山のはるのあけほの　二〇六二

同六年二月同家五首　春哥

山のはゝかすみはてたるしのゝめのうつろふ花にのこる月かけ　二〇六三

花のさかりに大宮大納言のもとより

かすならぬやとにさくらのおりくはとへかし人のはるのかたみに　(二〇六四)

返し

おほかたの春にしられぬならひゆへたのむ桜もおりやすく覧　二〇六四

殷富門院皇后宮と申ゝ時まいりて侍しに権亮大輔なとさふらひて夕花といふことをよみしに

つま木こりかへる山ちのさくら花あたらにほひをゆくてにや見る　二〇六五

建久七年三月閏日殿字治にて山花留客といふことを当座

春きての花のあるしにとひなれてふるさとうとき袖のうつりか　二〇六六

中宮女房船にて人々うたよみ侍しに

たつぬとてならふる舟の衣手に花もさらにや春をしるらん　二〇六七

大内の花さかりに宮内卿藤少将なとにさそはれて

春をへてみゆきになるゝ花のかけふりゆく身をもあはれとや思ふ　二〇六八

建保五年四月十四日院にて庚申五首 春夜

山のほの月まつそらのにほふより花にそむくる春のともし火

建保元年内裏詩哥合 山中花多

しくれぜし色ほにほほすからにしき立田の峯のはるの夕かぜ

繁古

さくらかゝ霞のしたにけふくれぬ一夜やとかゞ春の山びと

建保二年内裏詩哥合 河上花

繁古

花の色のおられぬ氷にこすさほのしつくもにほふ宇治のかはをさ

紀桜

なとり河はるのひかすはあらはれて花にそしつむせゝの理木

内裏哥合 朝落花

庭もせにうつろふころのさくら花あしたわびしきかすまさりつゝ

刺刺

君もしるし峯のあらしも雪とふる山さくら戸のあけほのゝそら

同詩哥合 山居春曙 二首之内

建保四年潤六月内裏哥合 春 十首之中

ちる花は雪とのみこそふるさとを心のまゝに風をふさしく

正治二年九月十首哥合 落花

わかきつるあとたに見えす桜花ちりのまかひの春の山風

院に詩哥合とてめされし元久二年六月 水郷春望

宮木もりなきさの霞たなひきて昔もとをきしかの花その

あしろ木にさくらゝきませゆくはるのいさよふ波をえやはとゝむる

承久元年七月内裏哥合 深山花

山人もすまていく世のいしのゆか霞に花は猶にほひつゝ

暮春雨

うくひすのかへるふるすやたとゝらんくもにあまねき春雨のそら

左大臣殿よりやへさくらをたまふとて 承久三年三月

いたつらに見る人もなきやへさくらやとかゝはるやよそにすきなん (二〇八二)

御返し

やへさくらやとのさかりのちかけれほこのはるの日そひかりそふら

ん 二〇八二

おなし三月八日内よりしのひてめされし三首のうち 野花

かくしつゝちりすは千世もさくらさくのへのいくかに春のすく覧 二〇八三

海霞

浦にたつもしほのけふりしたふらし霞すてたる春のゆくてを 二〇八四

老後仁和寺宮しのひておほせられし五首

河上花

みなの河峯よりおつる桜花にほひのふちのえやはせかるゝ 二〇八五

野外花

ふりまかふさくらいろこき春風に野なる草木のわかれやはする 二〇八六

庭上花

月草の色なるなくにうつしうへてあたにうつろふ花さくら哉 二〇八七

閑中花

わか身よにふるともなしのなかめしていくはる風に花のちるらん 二〇八八

権大納言家五首之中閑路花 貞応三年

山さくら花のせきもるあふさかはゆくもかへるもわかれかねつゝ 二〇八九

土御門内大臣家哥合 水辺躑躅 春六首

たつた河いはねのつゝしかけ見えて猶水くゝる春のくれなゐ 二〇九〇

故郷歌 冬

山吹のこたへぬ色につゆおちてさとのむかしほとふかひもなし 二〇九一

続拾 雨中藤花

しゐて猶そてぬらせとやふちの花春はいくかの雨にさく覧 二〇九二

山家暮春

ちる花に谷のしほゝしあとたえていまより春を恨やわたらん　二〇九三

三位中将公衡家にて旅宿三月尽

いほりさすは山かみねのゆふ霞たえてつれなくすくる春哉　二〇九四

夏

春後思花

わすられぬやよひのうらをしたふとて青葉に匂ふ花のかもなし　二〇九五

郭公初声

まつほとやさすかにしるき郭公ことしわすれぬくものをちかた　二〇九六

土御門内大臣宰相中将に侍し時五首哥よませられ侍し中に

卯花

ゆふつく夜いりぬるかけもとまりけり卯花さける白河のせき　二〇九七

承元二年祭使かむたちにとまりたるあしたにをくり侍し

紫右

思やるかりねのゝへのあふひくさ君を心にかくるけふ哉　二〇九八

返し　使少将忠明朝臣

葵草かりねのゝへのあはれをも誰ことのはにかけてとはまし　(二〇九八)

建保三年五月和哥所哥合　夕早苗

あらたまの年あるみよの秋かけてとるやさなへにけふもくれつゝ　二〇九九

建久六年二月左大将家五首　夏

あれまくも人はおしまぬ故郷のゆふ風したふのきの橘　二一〇〇

建久六年民部卿経房卿家哥合に初郭公

かほらすもまちいてつる哉郭公月にほのめくこそのふるこゑ　二一〇一

三宮より十五首哥めされし夏哥

とへかしな霞もきりもたなびかぬのさのあやめのあけほのゝそら　二一〇二

時すきすかたらひつくせ郭公たかさみたれのそらおほれぜて　二一〇三

院北面にて講ぜられし二首　昌蒲

てなれつゝすゝむいはねのあやめくさけふは枕に又やむすはむ　二一〇四

郭公

まちあかすさよのなかやまなかくにひとこゑつるきほとゝきす哉　二一〇五

建仁元年三月尽日哥合　雨後郭公

さみたれのなこりの月もほのくと更なれやちぬほとゝきす哉　二一〇六

正治二年二月左大臣家哥合　夕郭公

郭公たそかれ時のくもまよりわれなのりてやとはとふなる　二一〇七

五月雨朝

たまみつのゝきもしとろのあやめくさ五月雨なからあくるゝくかな　二一〇八

庭夏草

あけまきのあとたにたゆる庭もせにをのれむすへとしける夏草　二一〇九

建仁二年三月六首めされし夏哥

さみたれのふるの神すきくかてに水たかくなのる郭公哉　二一一〇

承元二年潤四月四日和哥所雨中郭公

たかためにぬれつゝしぬて郭公ふるとも雨の山ちわくらん　二一一一

秀能五首哥中郭公

こひすとやなれもいふきのほとゝきすあらはにもゆと見ゆる山ちに　二一一二

建保四年潤六月内裏哥合十首之中夏

ほとゝきすたかしのゝめをねにたてゝ山のしつくに羽しほるらむ　二一一三

承久元年七月内裏哥合暁郭公

新後
ほとゝきすいつるあなしの山かつらいまやさと人かけてまつらし　二一一四
水辺草
かりねせし玉江のあしにみかくれて秋のとなりの風をすゝしき　二一一五
建保五年四月十四日庚申五首夏暁
統後
なきぬなりゆふつけとりのしたりおのをのれにもにぬよはのみしか
さ　二一一六
建仁二年六月和哥所にて当座田家夏月
かとたふくほむけの風のよるくは月そいなはの秋をかりける　二一一七
水風晩涼
したくゝる水よりかよふ風のをとに秋にもあらぬ秋のゆふ暮　二一一八
建久五年夏左大将家哥合龍田河夏
ゆふくれは山かけすゝしたつた河みとりのかけをくゝるしら波　二一一九
名所夏月
影きよきなつみのかほと秋かけてしらゆふ花をてらすよの月　二一二〇
山納涼
夏の日のさすともしらぬ三笠山松のみかけそますかけもなき　二一二一
権大納言家海上螢
みつしほにいりぬるいそをゆく螢をのか思ひはかくれさりけり　二一二二
建仁二年六月みなせ殿のつり殿にいてさせたまうて六首題
をたまはりて御製にあはせられ侍し中に河上夏月
たかせ舟くだすよかほのみなれさほとりあへすあくるころの月影
海辺見螢
すまのうらもしほの枕とふ螢かりねのゆめちわふとつけこせ　二一二三
山家松風
松かけやと山をこむろかきねより夏のこなたにかよふ秋風　二一二四
建仁元年三月尽日哥合松下晩涼
このくれを夏とはたれかいはぬくむ松かけはらふ山おろしの風　二一二五
摂政殿詩哥合水辺涼自秋
雪とのみおつるしらあわに夏きえて秋をもこゆる滝のいはなみ　二一二六
夏衣秋たにたゝぬ神な月ぬせきの浪のいそくしくれに　二一二七
建保四年閏六月内裏哥合夏
統拾
なつほつるみをきにちかき河風にいはなみたかくかくるしらゆふ　二一二八
秋
統後
松尾哥合に初秋風　建暦二年
あらたまのことしもなかはいたつらに涙かすそふおきのうは風　二一二九
建久五年夏左大将家哥合
秋宮城野
秋きぬなゝ萩ふく風のそよさらにしはしもためぬ宮木のつゆ　二一三〇
関路関
世やはうき秋やはすゝしまの関うち風こゆる袖のしら波　二一三一
建保三年七夕内裏七首
あまの河水かけくさの打なびきたまのかつらも露こほるらん　二一三二
天河ふるきわたりもうつろひて月のかつらそ色にいてゆく　二一三三
あまのかはくゝとのなみの秋風にくもの衣をたつやとそまつ　二一三四
天河千たまもゆらにをるはたのなかき契りはいつかたえせん　二一三五
天河もみちのはしの色に見よ秋まつそてのくれをまつほと　二一三六
天河あれにしとこをけふはかりうちはらふ袖のあはれいくとせ　二一三七
二一三八

天河あくるいほともなさけしれ秋のなぬかの年の一夜を
　建久六年二月左大将家五首　秋　二一三九
あさといへとこの葉もしらぬ初風にわれのみもろさそてのしら玉
　閑中草花　二一四〇
あとたえて風だにとはぬはきのえに身をしる露はきゆる日もなし
　元久元年七月宇治御幸　山風　二一四一
かへり見るすそのゝくさ葉かたよりに限なき秋の山おろしの風
　正治二年九月院初度歌合　山嵐　二一四二
秋のあらしひとはもおしめ三室山ゆるす時雨のそめつくすまて
　建保元年内裏詩歌合　野外秋望　二一四三
むらさめの玉ぬきとめぬ秋風にいくのかみかく萩の上の露
なかめつゝくさのたもとはうつろひぬかりの涙もをちのしのはら
　同四年閏六月内裏歌合　秋　二一四四　二一四五
統後
なをさりのをゝあさちにをく露も草葉にあまる秋の夕くれ
　承久元年内裏歌合　秋夕露　二一四六
ゆふくれの草のいほりの秋のそてならはぬ人やしほらても見む
　建永元年七月和歌所歌合　朝草花　二一四七
あさなゝくした葉もよほす秋のえに鹿の涙を色にいてゆく
　海辺月　二一四八
新古
もしほくむ袖の月かけをのつからよそにあかさぬすまのうら人
　建久八年秋歌あまたよみける中に　二一四九
なかめつゝ思しことのかすくに むなしきそらの秋のよの月
　秀能かよませ侍し月歌　二一五〇
秋といへは月のたちをふく風のくもをはすてのひさかたの山
　摂政殿詩歌合　月明風又冷　二一五一
雲たえてのちさへ月をふくあらしこぬ夜うらむる床なはらひそ　二一五二
さむしろにはつしもさそひふく風を色にさえゆくねやの月かけ
　正治二年九月院に初度歌合　浦月　二一五三
あはちしま月のかけもてゆふたすきかけてかさせるすまのうら波
　建仁元年八月十五夜歌合　月多秋友　二一五四
千世ふへきたまのみきりの秋の月かはす光のすゑそひさしき
　月前松風　二一五五
ゆふへよりくもはまよはぬ月かけに松をそはらふ峯の木からし
　月前擣衣　二一五六
秋風によさむの衣うちわひぬふけゆく月のをちの山もと
　海辺秋月　二一五七
月にふすいせのほまをきぬ此宵もやあらさいそへの秋としのはむ
　湖上月明　二一五八
さゝ波やちりもくもらすみかゝれてかゝみの山をいつる月かけ
　古寺残月　二一五九
ほつせ山ゆつきかしたにてる月のあくるもしらぬありあけのかけ
　深山暁月　二一六〇
鳥のねもきこえぬ山の山人はかたふく月をあけぬとやしる
　野月露深　二一六一
をきあかすのへのかりいほのそてのつゆをのかすみかと月をさえゆく
　田家見月　二一六二
さをしかのつまとふ小田に霜をきて月影寒しをかのへのやと
　河月似氷　二一六三
すみわたる月かけきよみゝなせ河むすはぬ水を氷とそ見る
　建保三年八月十五夜内裏月前竹風　二一六四

月きよみたまのみきりのくれ竹にちよをならせる秋風そふく　二一六五

月前擣衣

月にうつ民の衣もやとことにくにさかへたるみよそさこゆる　二一六六

建永二年法皇栖霞寺におはしましし時駒牽のひきわけの使

月前眺望

きわもなき田のもほかりにしくものちりもまかはぬ秋の夜の月　二一六七

建永元年七月十三日和哥所当座

湖辺月

さゝなみやにほのうら風ゆめたえて夜渡月に秋のふな人　二一六八

元久元年七月宇治御幸　水月

にほの海やしたひてこほる秋の月みかく波まをくだすしは舟　二一六九

正治二年左大臣家哥合　山月

まつことは心の秋にたえぬれと猶山のほに月はいてけり　二一七〇

建暦三年後九月内裏哥合　深山月

しらかしのつゆをく山も道しあれは枝にも葉にも月そともなふ　二一七一

建久七年九月十三夜内大臣家　未出月

秋のそら月はこよひとはらふなりひかりさきたつみねのまつ風　二一七二

初昇月

さしのほるみかさの山の峯からに又たくひなくさやかなる月　二一七三

停午月

秋の月なかはのそらのなかはにてひかりのうへにひかりそひけり　二一七四

漸傾月

物ことに秋のあはれはかすそひてそらゆく月のにしそすくなき　二一七五

入後月

月はさそゆさたにのこるこゝろなりはそれとも見まし峯の曙　二一七六

内裏にて禁庭月

わすれすよみはしの霜のなかさ夜になれしなからの雲の上の月　二一七七

建久二年法皇栖霞寺におはしましし時駒牽のひきわけの使

にまいるとて

新古　嵯峨の山ちよのふるみちあとゝめて又露わくるもち月のこま　二一七八

九月十三夜内裏にて　山路月

山かせは月のさ衣はらへともをもちぬ雪はこのはこそふれ　二一七九

たまほこの道もさりあへぬ春の花をれかとまか山の月かけ　二一八〇

建保二年九月十三夜内裏月前風

すかのねやなか月の夜の月かけをはるかにわたるの一のあさ風　二一八一

建保六年八月十三日内裏中殿宴

秋夜侍　宴間詠汀月久明

応　製和歌

参議正三位行民部卿兼伊豫權守臣藤原定家上

いくらよそそてふる山のみつかさもをよはぬ汀にすめる月かけ　二一八二

三行三字之書

神主重保賀茂社哥合とてよませ侍しに

月　元暦元年九月　侍従

勅撰　しのへとやしらぬむかしの秋をへておなしかたみにのこる月かけ　二一八三

霧

はれくもり山のいはねにたつさうをなつる衣の袖かとそ見る　二一八四

野宿月　雅大納言家　頁応

秋給　ゆふつゆのいほりは月をあるしにてやとりをくるゝの一のたひ人　二一八五

建久五年八月十五夜　左大将家

見月思旅

まつほとをかたらぬ月にかこつともしらてやぬらんあらきはま一に　二一八六

対月間音

わすれすやはしめもしらぬそらの月かへらぬ秋のかすはよりつゝ　二一八七

月契潤月

月も又しかならふまてなれよとやかすそふ秋のそらをたのめて　二一八八

元久元年五辺殿に御わたりのゝち初て請せらる

序通基卿　読師　太政大臣

松間月　　応製　臣上

このまより月もちとせの色にいてゝきみかゝ世契庭のわかまつ　二一八九

野辺月

みよしのゝ雪ふる峯のちかけれは秋よりうつむ月のしたくさ　二一九〇

田家月

なかめつゝとはれすひさに秋の田のほのうへてらす月のいくよを　二一九一

羇旅月

事枕みやこをとをみいたつらにゆきゝの月のやとろしらつゆ　二一九二

名所月

さとわかすもろこしまての月はあれと秋のなかはのしほかまのうら　二一九三

同夜当座

八月十五夜翫月　應　製和歌

正四位下行左近衛権中将兼美濃介臣藤原朝臣

定家上

よろつ世はこよひそはしめやとの月なかはの秋の名はふりぬとも　二一九四

建仁元年三月尽哥合　湖上秋霧

篠汲やほの湖のあけかたにきりかくれゆくおきのつり舟　二一九五

建保四年潤六月　内裏哥合　秋

統百

をしかなくは山のかけのふかけ水はあらしまつまの月をすくなき　二一九六

建暦三年後九月内裏哥合　寒野虫

ゆく秋のすゑのゝこのはあさなゝそむれはよほろ虫のこゑゝ　二一九七

建保三年五月和哥所哥合　行路秋

うらわたすをらかたのへのしら露によものくさ木の色かはるころ　二一九八

建永元年七月十三日　和哥所　行路風

たまほこやゆくてのゝへのあさちまてうつろふ袖の秋のはつ風　二一九九

正治二年二月五人臣家哥合

唐衣すそのゝまくすゝ吹かへしうらみてすくる秋の夕風　二二〇〇

元久元年七月宇治御幸　野露

山しろのくゝゼのはらのゝしのすゝき玉ぬきあへぬ風のしらつゆ　二二〇一

建仁二年三月六首　秋哥

しもまよふをたのかりいほのさむしろに月ともわかすいねかてのを

ら　二二〇二

建暦三年九月十三夜内裏

哥合　河上月

なにはゝ江にさくやこの花しろたへの秋なき浪をてらす月かけ　二二〇三

暮山松

秋はいぬゆふ日かくれぬ峯の松よものこの葉の後もあひ見む　二二〇四

元久二年夏　院詩哥合　山路秋行

（新古）みやこにも今や衣をうつの山ゆふ〜もほらふつたのした道

夕つゝひゝこのまのかけも初雁のなくやくもゐの峯の稚　二二〇五

建仁三年和哥所哥合　海辺鴈　二二〇六

ゆくかりのたか秋風とう水ふちん波もふせかぬいそのとまやに　二二〇七

三宮より十五首哥めされし秋哥

とふかりの涙もいとゝそほちけりさゝわけしのへの萩の上の露　二二〇八

久方の月の桂のしたもみちやとかるそてそ色にいてゆく　二二〇九
なみたのみこの葉くれとふりはてゝうき身を秋のいふかひもなし　二二一〇

建久六年秋ころ大将殿にて末句十をかさいたしてよむへきよし
侍しに　当座

しほるへきよもの草木もをしなへてけふよりつゆのおきのうは風　二二一一
とれはけぬわくれはこほる秋なからよしみや木のゝ萩のしたつゆ　二二一二
こしすはみなおもかけにうかひきぬゆくすゑてらせ秋のよの月　二二一三
いさこえしおもへはとをき旧里をかさなる山の秋の夕きり　二二一四
ふけまさるひとまつ風のくらきよに山かけつらきさをしかのこゑ　二二一五
風なひくすゝきのすゑはつゆふかしこのころこそは初雁の声　二二一六

統後河風によわたる月の寒け小はやそうち人も衣うつなり　二二一七
むかしかなあはれいくよときてとへはやともる風にうつらなくせ　二二一八
みをちあまり見しをはなさとかをへつゝ秋のみおなし夕暮のそら　二二一九
ひとりねのさならぬとこもそてぬれぬわかれなれたるあか月のそら　二二二〇

おなしころ大将殿にて五首哥　秋色

そめてけり月の桂のすゑはまてうつろふころのゝへの秋風　二二二一

秋声

さえわたる霜にむかひてうつ衣いくとせ秋のこゑをつくらん　二二二二

秋香

かたみかなくれゆく秋をうちみつゝけふつむそてにゝほふしらきく　二二二三

秋情

あめおつるこのはをなにの哀とてなさこゝちする心わく睫見　二二二四

秋恋

うかりける山とりのおのひとりねよ秋をちきりしなかきよにとも　二二二五

同七年の秋内大臣殿にて　文字をかみにをきて日首哥中に

秋十

をきゝはらほとなき末の露おちて一夜はかりに秋風をふく　二二二六
峯にふく風にこたふるしたもみち一葉のをとに秋をきこゆる　二二二七
なくせみも秋のひゝきの声たてゝ色に見山のやとのもみちは　二二二八
へたてゆくきりも日かすもふかけれはわすれやしぬるとをきみやこに

しきたへの枕わすれて見る月のかそふ許のよなゝくのかけ　二二二九
ふりにけりとしくなれし月を見て思ひしことのさらにかなしき　二二三〇
ちりぬれはこひしきものを秋萩のけふのさかりをとはらとへかし　二二三一
はやせ河みなわさかまきゆく浪のとまらぬ秋を何おしむ睫見　二二三二
かりかねのくもゆくはねにをくしものさむさよころに時雨さへふる　二二三三
松しまのあまの衣手秋くれていつかはほさむつゆも時雨も　二二三四

内裏秋十五首哥合　秋風

おさまれる民のくさはを見せかほになひく田のもの秋のはつ風　二二三五

秋露

そてぬらすしのふもちすりたかためにみたれてもろさ宮木のゝつゆ　二二三六

秋月

いつはともわかぬときはの山人もそらにおとろく月のかけ我　二二三七

秋雨

花そめの衣の色もさたまらすのわさになひく秋のむらさめ　二二三八

秋花

たひ衣ひもとく花のいろくもとを里をのゝあたら朝さり　二二三九

秋鹿

このころのかりの涙のはつしほに色わさそむる峯の松風　二二四〇

秋虫

秋鹿

あさなゝくこの葉うつろひなくしかのこゑはりしるき秋の山かけ　二二四三

秋水

秋風のかつふきはらふ谷の戸におもふもきよくすめる山水　二二四四

秋霜

秋の色にのこるかたみのしもをたにをけかしくさ葉それもとよらす　二二四五

秋祝

山水に老せぬちよをせきとめてをのれうつろふ白菊の花　二二四六

秋旅

ふるさとはとを山とりのおのへより霜をくかねになかき夜のそら　二二四七

秋恋

下むせよもしほのけふりこかるとて秋やは見ゆる人はうらみし　二二四八

秋思

老か世はあはれすゑのゝ草かれに夜の思ひのなか月のそら　二二四九

秋雑

わたつうみや秋なき花のなみ風も身にしむころのふきあけのほま　二二五〇

仁和寺宮よりしのひてめされし　秋題

十首　永久二年八月

秋雨

あきの色と身をしる雨のゆくゝもにいこまの山もおもかはりして　二二五一

秋花

このくれの秋風すゝしから衣ひもとく花につゆこほれつゝ　二二五二

秋田

なかめあへぬほむけの風のかたよりに田のもふきこす峯のもみちは　二二五三

世やはうきしもよりしもにむすびをくおいそのもりのもとのくらはゝ　二二五四

秋祝

露しくれもるにつれなき秋山のまつにそ君のみよは見えける　二二五五

秋恋

初鳫のとをちもよほす秋風になれてまちかさ中そかれゆく　二二五六

秋夢

風さはくねさのはよくとうきてみし夢のたゝちそいやはかなる　二二五七

秋旅

涙かくるそてしのうらの秋の月やとかるまゝにまつやしほらん　二二五八

秋恨

心もてよゝのむかしやなちひけむ秋風いそくをかのくすはに　二二五九

秋雑

しられしなくくあかすなかきよもさわへのたつの秋の心は　二二六〇

内裏秋十首

夏はてゝぬるやかはへのしのめにそてふきかふる秋のはつ風　二二六一

をのつからいくよの人のなかむらん天のかはらの星合のそら　二二六二

わすれしな秋のしら露しきたへのかりいほのとこにのこる月かけ　二二六三

やとれともぬらさぬそてのわれからになれて久しき秋のよの月　二二六四

声たてゝたれ松風のをのれのみたゆまぬ月に衣うつらん　二二六五

またれつる月もはるかになくつるのこゑあけかたきなかきよのしも　二二六六

いくかへり梅をはきくになかめつゝしもよりしものそてしほる覧　二二六七

身をくたく年のいくとせなけきして思とちめし秋の涙そ　二二六八

たつた山ゆふつけとりのなく声にあらぬ時雨の色そきこゆる　二二六九

山ひめのかたみにそむる紅葉ゝをそてにこきいるゝよもの秋風　二二七〇

建保二年みなせ殿にて講ぜられし秋十首哥

応製　臣上

続古　もしほくむあまのとまやのしろへかはうらみてをふく秋のはつ風
あさらふのをゝしのほら打なびきをらかた人に秋風をふく
おほかたの秋をくつゆや玉はなす身なからくちし袖はほしてき
いく秋をたへていのちのなからへてなみたくもらぬ月にあよらん
宮木のほもとあらの秋のしけゝ小は玉ぬきとめぬ秋風をふく
ゆふつく日むかひのをかのうすもみちまたきさひしき秋の色哉
統千載　高砂のほかにも秋はあるものをわかゆふくれとしかはなくなり
河渡のくゝるも見えぬ紅をいかにち小とか峯あこがらし
たまきはるわか身しく小とふりゆけはいとゝ月日もおしき秋哉
しものたて山のにしきをゝりはへてなくねもよはるのへの松虫
承久元年七月内裏哥合　閑情秋
なさけなくふく秋風をしふらんこぬよのとこに衣うてとは
続後拾　庭紅葉
もる山もこのしたまてそしくろなるわか袖のこせのきのもみちは
閑情衣といふことを人〳〵よみ侍しに
荻の葉のつけふるしてし秋風を又しもさらに衣うつせ
依月思秋
いたつらにつもれは人のなかき夜も月見てあかす秋をすくなき
承久元年九月日吾哥合とて内よりのおほせこと
深夜秋月
おほかたのあらしもくもゝすみはてゝそらのなかなる秋のよの月　二二八五
遠山晩霧
ほのかなるかねのひゝきに霧こめてそなたの山はあけぬとも見す　二二八六

暮天聞鹿
かりかねのなきてもいはむすそなき昔のつらのいまの夕くれ　二二八七
紅葉深雨
続古　ふりまさるなみたも雨もそほちつゝそての色なる秋の山哉　二二八八
続後小倉山しくるゝころのあさなゝきのふはうすきよもの紅葉ゝ　建保五年四月十四日庚申五首　秋朝
承元三年九月新羅社哥合とて　二二八九
人のよませ侍し　紅葉
露しものしたてるにしきたつた姫わかるゝそてもうつる許に　二二九〇
内裏にて朝見紅葉
もみちはの猶いろまさるあさひ山夜のまの露の心をそしる　二二九一
建保二年九月十三夜　内裏暮山紅葉
しく小つゝそてぬれきつる山人のかへるいほりはあらぬもみち葉　二二九二
灯菊惜秋
如何ともむきくのはつしもむすほゝれそらにうつろふ秋の日かすを　二二九三
紅葉見秋
龍田河おられぬ水の紅になか小てはやさ秋のかけかな　二二九四
九月十三夜侍宴詠三首
秋山月
さゝ枕み山もさやにてる月の千世もふはかりかけのひさしさ　二二九五
秋野月
久方のあまつそらゆく月かけをとの小しめのゝ秋の白露　二二九六
秋庭月
雲のうへをてらさむ秋もしらさりきをしへし庭のみちの月かけ　二二九七
右大臣家三首哥合　夜深侍月

夜をかさねたゆますひさになかめする山のはをそき月をこひつゝ
故郷紅葉
うつろひし昔の花のみやことてのこるにしきの色をしくるゝ
河辺擣衣
こほた河こほたかためのかち衣ころもさひしきつちのをと哉
元暦元年宰相中将通親卿　五首之内
擣衣
さえまさるひゝさをそへてうつ衣かさなるよはに秋ぞくるゝん

冬

正治二年毎月哥めされし時　初冬
このころの冬の日かすのはるならは谷の雪けにうくひすのこゑ　二三〇二
時雨
山めくりしくれやをちにうつるらむくもまちあへぬ袖の月かけ　二三〇三
故郷時雨
むらくもや風にまかせてとふ鳥のあすかの里は打しくれつゝ　二三〇四
時雨知時　私家
いつはりのなき世なりけり神な月たかまことより時雨そめけん　二三〇五
寒草纔残
ふくかせのやとすこのはのした許しもをきはてぬ庭の冬くさ　二三〇六
建保二年内裏三首　時雨
山の井のしつくもかけもそめはてゝあかすはなにの猶しくる覧　二三〇七

水鳥
池にすむありあけの月のあくるよをとのか石しゐくうきねにそなく　二三〇八
寒草
霜か雪かおはなにましりさく花ののこり色もむかし許に　二三〇九
正治二年十月一日院御会当座
枯野朝
あさしもの色にへたつる思草きえすはうとしむさしの〻原　二三一〇
建仁元年三月尽日哥合嵐吹寒草
あさくふやのこるはすゑの冬のしもをき所なくふくあらし哉　二三一一
建保四年潤六月内裏哥合　冬哥
よしさらはかたみも霜に朽はてね今はあたなる秋のしら菊　二三一二
三宮十五首冬哥
神な月くれやすき日の色なれはしもの下葉に風もたまらす　二三一三
しからきのと山のあられふりすさひあれゆくころのくもの色哉　二三一四
正治元年十一月七日二条殿新宮哥合
紅葉残梢
冬もふかくしく〻し色とゝしみもて初雪またぬ峯のひとむら　二三一五
寒夜埋火
うつみ火のきえぬひかりをたのめとも猶霜さゆるとこのさむしろ　二三一六
文治三年冬侍従公仲よませ侍し冬十首
ふるさとのしのふのつゆも霜ふかくなかめしのきに冬はさにけり　二三一七
やとからそみやこの内もさひしさは人めか〻にし庭の月かけ　二三一八
しもかるゝよもきかそまのかれまより雪けにゝたる冬のわかくさ　二三一九
雲かゝる峯よりをちのしく〻ゆへふもとの里をくらすこからし　二三二〇
かこたしよ冬のみ山のゆふくれはさそなあらしの声ならすとも　二三二一

こけふかきいはやのとこのむらしく小よそたきかはやありてうき世を　二三二二
浦風のふきあげの松のうれこえてあまきる雪を波かとそ見る　二三二三
なかりへむいのちもしらぬ冬のよの雪と月とをわかひとり見る　二三二四
そらとりて又このくれのいかならむ日ころの雪にあとはたえにき　二三二五
又くれぬすくれはゆめの心ちしてあはれはかなくつもる年哉　二三二六

つかさはなれてのちつくくとこもりゐたるにしも月うしの日

統後　ときこしよるになりておほきおとゝのふみたまへる

月のゆく雲のかよひちかはれともをとめのすかたわすれしもせす　（二三二七）

結後　むかしのことかきくつし思いつるおりふしいとゝ哀まさりて

をとめこのわすれぬすかた世ゝふりてわか見しそらの月そはるけき　二三二八

建久六年二月左大將家五首　冬

霜の又のあさけのけふりたえくにさひしさなひくをちこちのやと　二三二九

正治元年左大臣家冬十首哥合

寒樹交松

冬きても又ひとしほの色なれやもみちにのこる峯のまつはら　二三三〇

池水半氷

池のおもはこほりやはてむとちそふるよろのかすを又しかさわは　二三三一

山家夜霜

ゆめちまて人めはかれぬ草の原をきあかすしもにむすほゝれつゝ　二三三二

閑路雪朝

雪のもるすまのぜきやのいたひさしあけゆく月もひかりとめけり　二三三三

水鳥知主

見なれてはこれもなこりやをしかものなれたるやとのぬしはわさけり　二三三四

旅泊千鳥

こきよするとまりさひしき塩風に又ゆめさまし千鳥なくなり　二三三五

湖上冬月

月にいつるかたこのあまのつり舟は氷か波かさためかねつゝ　二三三六

炉辺懐旧

つくくとわかよもふくる風のをとにむかしこひしきうつみ火のもと　二三三七

正治二年九月院にはしめて哥合侍しに水鳥

うすこほりゐるをしかものいろくに打いつる浪の花そうつろふ　二三三八

同年冬内裏にて頭中將通具朝臣人々にうたよませ侍しに

深夜水鳥

こほりゆくみきわといつるをしかもに山のはちきろありあけの月　二三三九

建仁二年三月六首冬哥

はまちとりつまとふ月の影寒し芦のかれはの雪のした風　二三四〇

建保四年内裏寒山月

月のうへにくもゝまかはてをくしもをあかすふきはらふ峯のさからし　二三四一

寒閑月　老後私家

山風のあれにしとこをはらふ夜はうきてそこほるそての月かけ　二三四二

行路霰

冬の日のゆく方いそくかさやとりあられすくさはくれもこそすれ　二三四三

遠村雪

あともなきすゑのゝ竹のゆきをれにかすむやけふり人はすみけり　二三四四

建仁元年十二月八日八幡哥合　社頭松

神かきや松につれなき夜のしもかはらぬ色よおきあかせとも　二三四五

月前雪

ふきみたるゆきのくもまをゆく月のあまきる風に光そへつゝ　二三四六

承久元年七月内裏哥合　冬水月

天河氷によとむ風さえてゆくかたをそき月をひさしき

杜間雪

ほつゆきのいのるやなにのたむけしていそくいくたのもうのしらゆふ　二三四七

正治二年二月左大臣家哥合　庭雪

とゝむへき人もとひこぬタくれのまかきを山とつもるしらゆき　二三四八

建仁元年三月尽哥合　雪似白雲

冬のあしたよしの〻山のしら雪も花にふりにしくもかとそ見る　二三四九

摂政殿詩哥合　雪中松樹低

はなと見る雪も日かすもつもりぬて松の梢は春のあとやき

風のまのもとあらの萩のつゆなからいくよか春を松のしら雪　二三五〇

秀能の五首哥　雪

あまつ風はつ雪白しかさゝきのとわたるはしのありあけのそら　二三五一

建保内裏哥合十首之中　冬

みそらゆく月もまちかし草垣のよしの〻里の雪のあさけに　二三五二

正治二年九月院初哥合　暁雪

あけぬるかこすゑおれふす松かねのもとよりしろき雪の山のは　二三五三

建久五年左大将家哥合　深草雪

ゆきをれの竹のしたみちあともなしあれにし後のふかくさの里　二三五四

文治五年十二月後京極摂政大納言の時雪十首哥

禁庭雪

さえのほるみはしのさくら雪ふりて春秋みするくものうへの月　二三五五

故郷雪

山人のひかりたつねしあとやこれみゆきさえたるしかのあけほの　二三五六

山家雪

まつ人のふもとのみちは絶ぬらむのきはのすきに雪ともるなり　二三五七

野亭雪

雪の内はなへてひとつになりにけりかれの〻色もたのむかきねも　二三五八

社頭雪

春日山おほくの年の雪ふりてはるのあさ日は神もまつらむ　二三五九

古寺雪

うつしけるの月のみかほはひかりあひてのきのあれまにつもるしらゆき　二三六〇

雪中恋人

かきくらすゆふへの雪にせきとりて心やみちにかよひわふらむ　二三六一

雪中述懐

かすまさる年にあはれのつもる武わかよふけゆく雪をなかめて　二三六二

雪中遠望

ふりまかふ雪をへたてゝいてつれとくもまにきゆるあまのとも舟　二三六三

雪中旅行

うちはらひやとかりわひぬ雪折のきゝのした道おもかはりして　二三六四

建保五年庚申　冬夕

ふりくらすよしの〻みゆきいくかとも春のちかさはしらぬ里哉　二三六五

はゝのおもひにてこもりぬたりし冬雪のあしたに大将殿より

みよしのやをほすて山のほる秋もひとつにかすむ雪のあけほの　(二三六六)

しもかれのまかきのゝへのけさの雪とをき心をにはに見る哉　(二三六七)

このさとはまつへき人のあともなし庭のしら雪みちはらふとも　(二三六八)

おもへともきみをたつねぬ雪のよに猶はつかしき山かけのあと　(二三六九)

なかめするわかそてならぬくさも木もしほれはてぬるけさの雪哉　(二三七〇)

御返し

おもかけのそれかと見えし春秋もさえてわするゝ雪のあけほの　二三六八

昔今心にのこすそらもなしかれのゝ雪のにほのひとむら　二三六九

わかやとの雪はいくへと春や見む あれにし後の蓬生のかけ　二三七〇

おもふてふたゝさはかりをわか身にて雪にへたゝる山かけもかな　二三七一

袖のうへはよもの木くさにしほれあひて狐友なき雪のした哉　二三七二

正治二年二月左大臣家哥合 冬 述懐

いたつらにことしもくれぬとはかりに冬はなけきそゝふ心ちする　二三七三

山野落葉といふことを 私家

みかりのゝとたちをうつむならしはに猶ふりまさる山のこからし　二三七四

松 竹 霜

庭のまつまかきの竹にをくしものしたあらはなる千世の色哉　二三七五

報恩会のついて歳暮述懐

思やれまくらにつもるしもゆきのむそちにちかき春のとなりは　二三七六

おなし会 山家懐旧

おもひいるみ山にふかきまきのとのあけくれしのふ人はふりにき　二三七七

おなし会 歳暮 承久三年

つきもせぬうきおもひいてはかすひてかはりはつなる年のくれ哉　二三七八

賀

建保三年九月十四日和歌所月翆千秋

きみかは世の月と秋とのありかすにをくや木草のよもの白露　二三七九

建仁元年鳥羽殿にてはしめて哥講せられ御あそひなと侍し

夜池上松風

いけ水に千世のみとりをちきるらしこゑすみわたる峯の松風　二三八〇

建永元年八月十五夜鳥羽殿御舟に御あそひあり夜うた人

みきわにさゝふらひて

秋の池の月にすむなる琴の(ね)を今より千よのためしにもひけ　二三八一

正治二年二月左大臣家哥合

松風のこゑさへほろのにほひにて花もちとせをちきるやと哉　二三八二

建久五年左大将家哥合 祝 春日山

かすか山みねのあさ日をまつほとのそらものとけきよろつ世の声　二三八三

建仁元年三月尽 哥合 寄神祇祝

あとたれしよものやしろも君にこそまもるかひある千世をならはめ　二三八四

正治二年九月哥合 十首 神祇

君をまもるあまてる神のしるしあれはひかりさしそふ秋の夜の月　二三八五

庭松

枝かはすたまのみきりの松の風いくよ君にちきりそふらむ　二三八六

建仁三年十一月入道殿和哥所にて九十賀たまはり給し時

きみにけふとゝせのかすをゆつりをきてこのかゝりのよろつ世やへむ　二三八七

承元二年住吉哥合

わかきみのときはのかけは秋もあらし月の桂のちよにあふとも　二三八八

仁和寺宮にて寄松祝

このさとはをかへのまつ葉もろ月のいつともわかぬちよそ見えける　二三八九

建保三年五月哥合 松経年

たむけ草つゆもいくよかちきりをきしはまつかえの色もかはらす　二三九〇

一条の家にてはしめて我松といふ題を人々よみ侍しに

なっそちのとなりをしむるやとにうへて千せのはしめは松やならはむ　二三九一

夕松風　私家

松にふく風のみとりに声そへてちよの色なるいりあひのかね　二三九二

建暦三年とよのみそきよたっひとけをこなはれしつきの日中

将雅経朝臣

きみまちてふたっひすめる河水にちよそふとよのみそさとそ見し　（二三九三）

返し

君かよのちよにちよそふみそきしてふたっひすめるかもの河水　二三九三

皇后宮権亮公衡朝臣いろゆるされてともいまたしらさりしに御禊行幸に菊のしたかさねきられたりしを見てつきの日

白菊のねはひともとの色なれとうつろふほとは猶そ身にしむ　二三九四

返し

たくふなる名と思ふにもしらきくのうつろふ色はけに身にそしむ　（二三九四）

少将になりたるよろこひにおなし中将身にうらみありてこもりゐられたりしころ三日をすくして

うれしさをとはてすきつる日数にも思ふ心の色や見ゆらむ　二三九五

返し

うれしさをとはれぬほとの日数ゆへわくら心も色や見ゆらむ　（二三九五）

為家元服したるのちほとなく従上のかういしたるよろこひに

まさつねの中将

袖のうちに思なれてもうれしさのこのはるいかに身にあまるらむ　（二三九六）

返し

そてせはくはくゝむ身にもあまるまて此はるにあふみよそうれしき　二三九六

おなし中将のことをありきそめにつかはしたる千本のつゝみかみに

あとならへおもふおもひもとおりつゝ君にかひあるしきしまの道　二三九七

返し

しきしまのみちしるさ身にならひをきつ末とおろへきあとにまかせて　（二三九七）

年ころのこそみかなはて辞申す三位に猶叙すへきよしおほせこと侍しかは侍従をひとたひにと申てゆるされたりしにおなし

中将

うれしさはむかしつゝみしそてよりも猶たちかへるけふやことなる　（二三九八）

返し

うれしさは昔のそての名にかけてけふ身にあまるむらさきの色　二三九八

おなし日　宮内卿

うれしさは昨日やきみかつむ菊のとへとや猶もけふをまつ覧　（二三九九）

返し

けふをけに花もかひある菊の色のこき紫の秋をまちける　二三九九

とは申しかとしつみぬる事をのみなけき侍しに思よらさりし

参議の闕におほくの上臈をこえてなりて侍しあした

宮内卿

ふーておもひをきても身にやあまるらむこよひのはるのそてのせは　（二四〇〇）

さは

返し

うれしてふたれもなへての事のはをけふのわか身にいかっこたへむ　二四〇〇

水無瀬殿にあたらしくたきおとされいしたてられてのちまいりてあしたに清範朝臣のもとへ地形勝絶のよし申し中に

あゝけむもとのちとせにふりもぜてわか君笑る峯のわか松　二四〇一
かすかのやまもゝみ山のしゝとてみやこのにしもしかそすみける　二四〇二
きみかせにぜきいるゝ庭をゆく水のいはこす数はちよも見えけり　二四〇三
院御所六月庚申扇合のよしにて左才扇かゝるへき哥三条
宮よりめされ侍よし清範朝臣申しかはたてまつりし
おさまれるみよにあふきの風なれはよもの草葉もまつそなひかむ
三条中将この忍つかさにて年たけぬるよし述懐百首におほくよ
みてほとなく右兵衛督になりてあしたに
かしは木はけふやわか葉の春にあふ君かみかけのしけき恵に　二四〇四
返し　兵衛督
春の雨のふりぬとなにか思けむめくみもしけきもりのかしは木　二四〇五
祖父中納言の春日行幸の賞をつのりて正三位したるあしたに
右兵衛督
神も又きみかためとやかすか山ふるきみゆきのあとのこしけむ　（二四〇六）
返し
うつもれしをとろの道をたつねてそふるきみゆきにあともとひける　二四〇六
宮内卿のそみ申さぬに三位ゆるされたるあしたに
きみか世にむかしいかなる契りありてをのくかゝる春にあふらむ　二四〇七
返し
人はいさなれもやすらむ君かよにひとりそほるにあふ心ちする　（二四〇七）
右兵衛督子の少将のよろこひに
みかさ山わかはの松にいかはかりあめのめくみのふかさをか見る　二四〇八
返し
年の内に春の日かけやさしつらむ三笠の山のめくみをそしる　（二四〇八）
日吉禰宜親成七十賀に人哥つかはしゝ時
もゝとせにみそとせたらぬいはね松ちよを待らし色もかはらす　二四〇九
おなし八十賀
百とせはやそちの坂にちかけれと神のめくみのちよそほるけき　二四一〇
元久三年正月高陽院殿初度
応製　庭花春久
あらたまの年のちとせのはるの色をかねてみかさの花にまつかな　二四一一
恋
建仁二年六月みなせ殿のつり殿にいてさせたまうてにはかに
六首題をたまはりて御製にあはせられ侍し中恋三首
初恋
はるやとき〻とはかり聞し鶯のはつねをわれとけふやなかめむ　二四一二
忍恋
夏草のましるしけみはきえね露をきとめて人の色もこそ見れ　二四一三
久恋
わかなかはうき田のみしめかけかへていくたひくらぬもりの下葉も　二四一四
おなし年九月十三夜水無瀬殿恋十五首哥合に　春恋
わすれはや花にたらまよふ春霞それかとはかりみえしあけほの　二四一五
夏恋
ほとゝきすそらにつたへよ恋わひてなくや五月のあやめわかすと　二四一六
秋恋
こよひしも月やはあらぬ大かたの秋はならひそ人そつれなき　二四一七
冬恋

新古 とこのしも枕の氷さゑわひぬむすひもをかぬ人のちきりに　二四一八
暁恋
おもかけもまつよむなしきわかれにてつれなくみゆるありあけのそら　二四一九
暮恋
なかめつゝまたはとおもふくもの色をたか夕くれと君たのむ覽　二四二〇
羈中恋
きみならぬこの葉もつらしたひ衣はらひもあへす露こほれつゝ　二四二一
山家恋
風ふけはさもあらぬ峯の松もうしこひせん人はみやこにをすめ　二四二二
故郷恋
つれなきをまつとせしまの春の草かれぬ心のふるさとのしも　二四二三
旅泊恋
わすれぬは浪ちの月にうれへつゝ身をうしまとにとまる舟人　二四二四
関路恋
すまのうらや浪におもかけたちそひて関ふきこゆる風をかなしき　二四二五
海辺恋
わかれのみをしまのあまの袖ぬれて又はみるめをいつかかるへき　二四二六
河辺恋
君とり河わたれはつらしくちはつる袖のためしのせゝの埋木　二四二七
寄雨恋
ゆくゑなきやとはとゝへはなみたのみさのゝわたりの村雨のそら　二四二八
寄風恋
新古 白妙の袖のわかれに露落て身にしむ色の秋風そふく
建久五年夏左大将家哥合恋三嶋江　二四二九

うつりにきわかれ心からみしま江の入江の月のあかぬ俤　二四三〇
建仁元年三月尽哥合　遇不遇恋
人心ほとは雲ゐの月はかりわすれぬ袖の涙とふらむ　二四三一
正治二年二月左大臣家哥合　夏恋
よゐなからくものいつことおしまれし月をなかしと恋つゝそぬる　二四三二
宇治御幸　夜恋　元久元年七月
まつ人の山ちの月もとをけれはさとのなつらきかたしきのとこ　二四三三
建仁二年三月六首之中恋
たのむ夜の木のまの月もうつろひぬ心の秋の色をうらみて　二四三四
遇不遇恋　承元二年閏四月四日和哥所
とひこかしまたおなし世の月を見てかゝる命にのこる契りを　二四三五
承元四年九月西宮田宮哥合　寄月恋
やとりこしたもとは夢かと許にあらはあふよのよその月かけ　二四三六
三宮十五首恋哥
露しくれした草かけてもる山のいろかすならぬ袖を見せはや　二四三七
おほかたはわすれはつともわするなよ在明の月のありしひとこと　二四三八
ならふなと我もいさめしうたゝねを猶物思ふおりはこひつゝ　二四三九
勅撰 建保五年四月　庚申　久恋
こひしなぬ身のをこたりそ年へぬるあらは逢よの心つよさに　二四四〇
新古 建永元年七月和哥所　祝恋恋　当座
むせふともしらしな心かはらやに我のみけたぬ下のけふりは　二四四一
建暦三年三月内裏恋哥三首
やとりせぬくらふの山をうらみつゝはかなの春の夢の枕や　二四四二
ちきりのみいとゝかりはのならしはらたえぬ思ひの色そまされる　二四四三
影をたにあふせにむすへ思河うかふみなわのけなはけぬとも　二四四四

建暦三年九月十三夜内裏哥合　旅宿恋

とゝめをきし袖のなかにや玉くしけふたみのうらは夢もむすはす　二四四五

建保四年閏六月内裏哥合　恋

勅撰あふことはしのふの衣あはれなとまれなる色にみたれそめけむ

勅撰こぬ人をまつほのうらのゆふなぎにやくやもしほの身もこがれつゝ

九月十三夜内裏　寄海恋

人こゝろうき涙たつるゆらのとのあけぬくれぬとねをのみそなく　二四四六

建保四年内にて寄月恋

なにはなる身をつくしてのかひもなしみしかき芦の一夜はかりは　二四四七

正治元年冬、左大臣家冬十首哥合

契歳暮恋

紙ち　二四四八

あらたまのとしのくれまつ大そらはくもりはかりのなくさめもなし　二四四九

紙後　住吉哥合　旅宿恋

やとりせしかいほの萩の露はかりきえなてその色にこひつゝ　二四五〇

恋不離身といふ心を

心をはつらき物とてわかれにし世々のおもかけなにしたふらむ　二四五一

仁和寺宮花五首　寄花恋

花のこと人の心のつねならはうつろふのちもかけはみてまし　二四五二

建久七年内大臣殿にて文字をかみにをきて廿首哥よみしに

恋五首　かたおもひ

神なひのみむろの山の山風のつてにもとはぬ人そこひしき　二四五三

たましひのいりにし袖のにほひゆへさもあらぬ花の色そかなしき　二四五四

おくもみぬしのふの山にみちとへはわかなみたのみさきにたつ哉　二四五五

もしほたれすまのうら波たちなれし人のたもとやかくはぬれけむ　二四五六

ひたくくみうつすみなわを心にて猶とにかくに君をこそ思へ　二四五七

中納言長方卿五首哥よませ侍し中に　二四五八

絶久恋

それとたにわすれやすらむいまさらにかよふ心はゆめに見ゆとも　二四五九

建久六年二月五人将家五首恋

おもひねはたかに心にて見えねとも夢にそいとうかれはてぬる　二四六〇

建保右大臣家六首哥合　行路見恋

露ををくゐての下をひさ許もむすはぬのへの草のゆかりに　二四六一

山家夕恋

涙せくやともは山にかくろへてあらはにこふる夕暮そなさ　二四六二

承久三年八月三御門院よりしのひてめされし　夜長増恋

秋の夜のとりのはつねはつれなくてなく〳〵見えしゆめそみしかき　二四六三

寄名所恋　私家

こく舟の風にまかするまほにたにそことをしへぬあふの松はら　二四六四

忍待恋

をしほ山千世のみとりの名をたにもそれとはいはぬ暮そひさしき　二四六五

寄螢恋

いとゝ又あまるおもひはもえつきぬそてのほたるの光見えても　二四六六

隔遠路恋

たつぬともかさなるせきに月こえてあふをかきりのみちやまとはむ　二四六七

暮山恋　権大納言家

うつせみのは山もりくる夕日かけうすくや人とねをのみそなく　二四六八

貞永元年七月人殿哥合恋十首

寄衣恋

秋草の露わけ衣をきもせすねもせぬ袖はほすひまもなし　二四六九

寄鏡

ゆく水の花のかゝみの影もうしあたなる色のうつりやすさは　二四七〇

寄弓

かり人のひくやゆすゑのよるさへやたゆまぬ関のもるにまとはむ　二四七一

寄玉

緒をたえしかさしの玉と見ゆはかりきみにくたくるそてのしらつゆ　二四七二

寄枕

統古　わすれすよみとせのゝちの新枕さたむはかりの月日なりとも　二四七三

寄帯

如何せんうへはつれなき下帯のわかれしみちにめくりあはすは　二四七四

寄絲

夏ひきのいとしもなれし俤はたえてみしかきのちそかなしき　二四七五

寄莚

あつまのゝつゆのかりねのかやむしろ見ゆらんきえてしきしの上とは　二四七六

寄舟

白妙の袖のうらなみよるくはもろこし舟やこきわかる覽　二四七七

寄網

人心あだなる君のみたつしきのあみのゆくてになとかゝる覽　二四七八

はしめて人に

統古　かきりなくまた見ぬ人のこひしきはむかしやふかく契りをきけむ　二四七九

恋哥とて

うつりにし心のいろにみたれつゝひとりしのふのころもへにけり　二四八〇

あともなき浪ゆく舟にあらねとも風をしるへに物思ふころ　二四八一

世々かけてつらきちきりにあねそめてふかき恩ひの色をかひなき　二四八二

なけくともこふともあはむみちやなき君かつらきの峯のしらくも　二四八三

あたしのゝわかはの泉にをくつゆのそてにたまらぬ物とこそ思へ　二四八四

わさかへりおつれはこほるたきつせのしたにくたけていくよへぬらむ　二四八五

神な月のゝろまとろまてあかして

かなしさのたくひもあらし神な月ねぬよの月のありあけのかけ　二四八六

つゝむことある人のはるころとをくわかれけるに

統古　けふやさはへたてはてつる春霞はれぬ思ひはいつとわかねと　二四八七

はるものこしにあひたる人の梅花をとらせていりにける又の

統拾　心からあくかれそめし花のかに猶物思はるのあけほの　二四八八

としおなし所にて

又

統拾　秋のみやのちもしのはむ梅花にほふのさはのはるのよの月　二四八九

かけはかり見てかへりける道にて火のあるよし人のいふに

こひくてあふともなしにもえまさるむねのけふりやそらに見ゆ覽　二四九〇

ことなることなき女のこゝろたかくおもひあかりてつれなかりけれは

さても猶おらてはやまし久方の月の桂の花と見るとも　二四九一

みやつかへしける女のつほねにてたつぬるにかくれけれはかゝみのふたをとりかくしてかへさゝりけるのちその女ある人のもとにさたまりぬけれはそのふたをかへしやるとて

ますかゝみふたりちきりしかねことのあはてやゝかてかけはなれなむ　二四九二

返し

身こそかくかけはなるともますかゝみふたりみしよの夢はわすれす　（二四九三）

秋のくれをもろともにおしみあかしてさとへいてにける人に
いてぬ人につたへて　二四九三
如何せんすてゝし秋をしたふとて身もおしからすおしき別を
うらめしやけふしもかふる衣手にいりにしたまのみちまとふらむ　二四九四
返し
わすれねよしたひてくれし秋よりもあたにたつなはおしき別を　(二四九三)
をろかなるなみたも見えぬ袖の上をとゝめし玉と誰かたのまむ　(二四九四)
ある所なる人を我には、かるよしをきゝて三位中将
きみならてかよふ人なきよゐ〳〵をぬぬぎもりにかこたさらなん　(二四九五)
返し
あふさかはきみかゆきゝときこしよりまた見ぬ山にふみもかよはす　二四九五
心かはりにける人に
あらはれてしもよりのちの色なからさすかにかれぬ白菊の花　二四九六
かはる色をたかあさ露にかこちても中の契りそ月華の花　二四九七
ふみつたふる人さはることありてかきたえて
ふみかよふみちもかりはのをのれのみこひはまされるなけきをそする　(二四九八)
返し
みかりのゝかりそめ人をなら柴にわれそふみ〳〵し道はくやしき　二四九八
かさりなくしのひて人にしらせさりける人に
紅古
あちきなくなにと身にそふ佛そをれとも見えぬやみのうつゝに　二四九九
返し
いつほりのたかおもかけか身にそはむ夢にまさらぬやみのうつゝに　(二四九九)
ありあけのあか月よりもうかりけりほしのまきれのよひのわかれは　二五〇〇
舟よするおもひもあらしよひのまのわか小は星のまき れなりとも　(二五〇〇)
如何せんさすかよな〳〵みなれさおしつくにゝころ宇治のかはをさ　二五〇一
うき舟のなにの契にみなれ稀あたなる袖をくたしそめけむ　(二五〇一)
しのふともこふともしらぬつれなさに我のみいくよなけきてかねむ　二五〇二
しのはれすこひすは何と契りとかうきにそへたるなけきをもせむ　(二五〇二)
せきわひぬいまはたおなしなとり河あらはれはてねせゝの理木　二五〇三
なとり河ゆくての浪にあらはれてあさゝを見えんせゝの理木　(二五〇三)
思やれさとのしるへもとひかねてわか身のかたにくゆるけふりを　二五〇四
とひかぬるさとのしるへに中たえていまやあとなきけふりなる覧　(二五〇四)
その人のもとより返事に
なにかとふおもひもいとゝすゑの松わかなみならぬ浪もこゆなり　(二五〇五)
返し
こえくす心をかくるなみもなし人のおもひそすゑのまつ山　二五〇五
恋哥よみける中に
時のまもいかに心をなくさめて又あふまての契りまちみむ　二五〇六
新古
かきやりしそのくろかみのすちことに打ふすほとは傳そたつ　二五〇七
わかれてのおもひをさそとしりなから誰かはときし夜半の下紐　二五〇八
きてなれしにほひを色にうつしもてしほるもおしき花そめの袖　二五〇九
とをき所にゆきわかれにし人に
心をはそなたのくもにたくへても猶こひしさのやるかたそなき　二五一〇
あな恋しふさかふ風もことつてよ思ひわひぬる暮のなかめを　二五一一
おもひいつる心そやかてつきはつる契りそらの入逢のかね　二五一二
人めもりへたつるみちをおもふよりやかてもむねにとつる関戸　二五一三
菊撰
誰もこのあはれみしかき玉のをにみだれて物を思はすもかな　二五一四
むすひをくなのみなかゝわたり河わかてにかけむ浪とやはみし　二五一五

をのつからあはれとかけむ一ことも誰かはつてむやへのしらくも　二五一六
けふまては人もわすれすと許もうつゝにしらぬなかそかなしき　二五一七
契りをきしをとをたのみにしのよともおなし風たによかすやある覧　二五一八
つゝむことありてふみやることもせぬ人のてならひしたるを
人つてに見て
うらゝくにたゝかさすつゝもしほくさみるよりいとゝ立けふり哉　二五一九
人のもちたるあふさにうつの山へのうつゝにもとかきたるを
見て
続後
さそなけくこひをすゝかのうつの山うつゝの夢の又し見えねは　二五二〇
をのつからそれと許をよそにみてむねにせかるゝ水くきのあと　二五二一
ひさしくかきたえたる人に
続後
いかゝせむありしわかれをかきりにて此世なからの心かはらは　二五二二
限りあるむ命も更になからへし是よりまさる月日へたては　二五二三
身をつくしいさ身にかへてしつみらむおなしなにはのうらの浪かせ　二五二四
涙せくむなしきとこのうき枕くちはてぬまのあふこともかな　二五二五
こひしさを思しつめむ方そなき逢見しほとにふくろよことは　二五二六
よしさらはおなし涙にくれなゐの色にをこひん人はしるとも　二五二七
続後
山のほにまたれていつる月かけのほつかに見えし夜はの恋しさ　二五二八
なをさりにたのめしほともすきはては何にかくへき命なるらむ　二五二九
いかさまに恋もなけきもなくさめむ此世なからのあらぬよも哉　二五三〇
あすしらぬ世のはかなさを思よにもなれぬ日数をいとゝかなしき　二五三一
はかなしな夢にかよはむ夜なゝをかたみにそれと思なすとも　二五三二
をのつから人もなみたやしるからむそてよりあまるうたゝねの夢　二五三三
おもかけの身にそふ袖の匂ひゆへたゝその色にしむ心哉　二五三四
思いつるはるの衣のかたみまていはぬ色にそちしほそめてし　二五三五
身にかへて人をおもはてこひみはやなきになしても逢よありやと　二五三六
まつらむとちきりしほとをわすれすはたれとなかめて日をくらすらむ　二五三七
かくしらはをたえのはしのふみまとひわたりてたゝにあらましものを　二五三八
をしからぬいのちもいまはなからへてをなし世をたにわかれすも哉　二五三九

雑

旅

伊勢の勅使の御ともにすゝかのせきこえしに山なかのさくら
さかりなりしゝたにて
えそすきぬこれやすゝかの関ならむふりすてかたき花のかけ哉　二五四〇
守治御幸に秋旅
わか庵は峯のさゝはらしかそかる月にはなるな秋の夕つゆ　二五四一
建暦三年八月内裏哥合　山暁月
やと小月衣手をもしたひ枕たつやのちせの山のしつくに　二五四二
河　朝霧
あさほらけいさよふ浪もきりこめてさとらひかぬるまきのしま人　二五四三
建仁三年秋和哥所哥合　羇中暮
たらまよふくものはたてのそらことにけふりをやとのしろへにそと
ふ　二五四四

山家松

つれ〳〵とまつにくたくる山風もさとから人の心をやしろ　二五四五

正治元年冬　左大臣家十首哥合

羇中晩嵐

新古　いつこにかこよひはやとをかり衣ひも夕くれの峯の嵐に

同二年二月同家哥合　秋旅

新古　わすれなん松となつけそ中々にいなはの山の峯の秋風

建仁二年三月六首旅

新古　そてにふけさそなたひねの夢もみし思ふ方よりかよふうら風

建永元年　秋和哥所　暮山雲　当座

あとたえてとはれぬ山をたかみそき沖ふへのそらになひくしらくも　二五四九

建保　右大臣家哥合　羇中松風

続後　なれぬよのたひねなやまし松風に此さと人やゆめむすふ覽　二五五〇

摂政殿詩哥合　羇中眺望

秋の日のうすき衣に風たちてゆく人またぬ遠の白雲　二五五一

かりいほやなひくほむけのかたよりに恋しき方の秋風そ吹く　二五五二

建仁元年十二月八幡哥合　旅宿嵐

故郷にさらはふきこせ峯の嵐かりねの山の夢はさめぬと　二五五三

母のおもひに侍し年のくれにひえの山にのほりて中堂にこもりて侍し春の始もわかれすかつふる雪にあとたえたりしあした入道殿山のおほつかなさなとこまかにかきてけ(つ)給ておくに

子を思心や雪にまよふらむ山のおくのみ夢に見えつ　(二五五四)

みたひおかみひとたひたてしおのゝをとをいまさく許思やる哉　(二五五五)

御返し

うちもねす嵐のうへのたひ枕みやこのゆめにわくる心は　二五五四

おのゝをとをたてしちかひもいさきよく雪にさえたる杉のしたかけ　二五五五

建久七年内大臣殿にて文字をかみにをきて廿首哥よみし

中にたひのみち

たにの水峯たつくもをこえくれて枕ゆふへの松の秋風　二五五六

ひかすゆく山と海とのなかめにてはるより秋にかはる月かけ　二五五七

のさにおふるくさのなかけしやとの月あれゆくかせやかたみそふらむ　二五五八

みやことてくものたちねにしのへとも山のいくへをへたてきぬらむ　二五五九

ちきりきなこれをなこりの月のころなくさむゆめもたえてみしとは　二五六〇

松尾哥合　山家夕

身におひてすむへき山の夕くれをならはぬたひと何いそく覽　二五六一

内裏哥合　山夕風

かねのをとを松にふきしくおひ風に妻木やをもきかへる山人　二五六二

野晩月

打はらひさらわくるのへのかすゝにつゆあらはるらありあけの月　二五六三

内よりめされし哥　羇中

そこはかと見えぬ山ちにことゝへと今夜もうとし白雲のやと　二五六四

旅泊

かちまくらたれとみやこをしのはまし契りし月のそてにみえすは　二五六五

みなせ殿の山のうへの御所つくられてのちまいりて池なとみめくりてまかりいつとて清範朝臣のもとへ

おもかけにもしほの煙たちそひてゆく方つらき夕霞哉　二五六六

みてもあかぬはるの山へをふりすてゝ花のみやこそたひ心ちする　二五六七

思やる月こそ水にやとらめまくらむすはぬかへるさのみち　二五六八

述懷

建久五年夏左大將殿哥合述懷

浮田杜

きみはひけ身をそうきたのもりのしめたゝひとすらにたのむ心を　二五六九

述懷三首　建永元年秋和哥所

新古　君か世にあはすはなにを玉のをのなかくとまてはおしまゝしみを　二五七〇

紋　我そみしみよの始の秋の月年は〳〵にけりもとの身にして　二五七一

紋　思をくつゆのよすかのしのゝくさ〳〵君をたのむ身は消ぬとも　二五七二

承元三年少將具親朝臣八幡にて講すへきよし申こかはよみてをくり侍し

ぜく袖は唐紅の時雨にて身のよりはつる秋をかなしき

秋風に涙をきほゝましりなん昔かたりの峯の月かけ　二五七三

同四年九月栗田宮哥合　于時　辞職　二五七四

寄海朝

わかの浦やなきたる朝のみをつくしくちねかひなき名たにのこらて　二五七五

寄山暮

おもひかねわか夕暮の秋の目にみかさの山はさしはなゝにき　二五七六

紋　おなしこゝろ

紋拾　なきかけのおやのいさめはそむきにきこを思ふみちの心よはさハ　二五七七

賀茂社哥　社頭述懷

あはれしれ霜より霜にくちはてゝ四代に上りにし山あひの袖　二五七八

承元三年五月住吉哥合　寄山雜

ゆくすゑのあとまてかなしみかさ山道あるみよにみちまとひつゝ　二五七九

松尾哥合　社頭雜

神かきやわか身のかたはつれなくて秋にそあへぬくすのうら風　二五八〇

建暦三年潤九月内裏哥　于時侍従三位

寄風雜

あすかゝは今はふるさと吹風の身はいたつらに秋そかなしき　二五八一

三宮十五首雜哥

あめつちもあはれしるとは古のたかいつはりそ戸鳴の道　二五八二

つれなくて今もいくよのしもかゝむくちにし後のたにの埋木

承元のころほひ内より古今をたまはりてかきてまいらせし

おくに

紋後　ためしなき世々の埋木朽はてゝ又うきあとの猶やのこらむ　二五八四

てるひかりちかきまもりは名のみして人のしもにや思きえなむ

ふるき哥をかきいたしてゝ和哥宮にまいらすとて

年深くしく小のふるはかきそをく君にのこさぬ色や見ゆると　二五八六

承久三年内よりめされし述懷哥

神かけていのりし道の埋水むすひもほてぬかけやたえなむ　二五八七

為家元服したる春加階申とて兵庫頭家長につけ

侍し

子を思ふふかき涙の色にてゝあけの衣の一しほも哉　二五八八

ゆるさるへきよし御気色侍けれは

返し　家長

道を思心の色のふかけれはこの一しほも君をこむへき

そのたひ叙侍にき　（二五八八）

宰相三中(の)七人帯剱先例なきよしを申て侍従を辞申たり
し時ある ふるき人のもとより
思ひとる身にしたがはぬ心もて立はなれては猶やこひしき　(二五八九)
返し
老らくの世のことはりを身にしれとまた面影は立もはなれす　二五八九

京官除目のついでに下臈参議おほく納言昇進あるへき
よしきこえしに正三位を申とて清範朝臣につけ侍し
雪の内のもとの松たにいろまされかたへの木々は花もさく也　二五九〇
人のよろこひはなくてゆるされ侍き
建久六年叙位にともにかゝいしたるあしたに左衛門督
隆房卿
くれ竹にこつたふとりの枝うつろうれしきふしもともにこそしれ　(二五九一)
返し
もゝちとりこつたふ竹のよのほともにふみゝしふしそうれしき　二五九一
四位しての5臨時祭日越中侍従舞人にて内どいてしほと
に
たちかへり猶そこひしきつらねこしけふのみつのゝ山あゐのそて　二五九二
返し　つきの日
山あゐのしおれはてぬる色なからつらねしそてのなこりはかりを　(二五九三)
小侍従にゆかりある人のむかへにつかはしたれはまかるに
ことつけやすると申しかはその人のかいなにかきつけし
怨はや世にかすならすうき身をはわきてとふへき人もとはすと　二五九三

返し
まてとかくとはれぬわれを打かへしうらむるにこそねたさをひぬれ　(二五九三)
西行上人みもすその哥合を申て判すへきよし申しをいふかひ
なくわかゝりし時にてたひ〳〵かへさい申しをあなかちに申
をしふるゆへ侍しかはかきつけてつかはすとて
山水のふかゝれとてもかきやらす君に契りをむすふ許そ　二五九四
返し　上人
むすひなかすゝ忘を心にたゝふれはふかく見ゆるを山かはの水　(二五九四)
又
神ら山松のこすゑにかくるふちの花のさかえを思こそやれ　二五九五
又返し
かみら山きみか心のいろをみむした葉のふちに花しひらけは　(二五九五)
と申とくり侍しころ少将になりてあくるとし思ゆへありて
のそみ申さゝりし四位して侍き
みなせ殿にさふらひしに大僧正のなかうたをよみてたてまつ
られたる返しだゝいまつかうまつるへきよしおほせこと侍し
かはやかてかきつけ侍し
さてもいかに　わしのみ山の　月のかけ　つるの林に　いりしより
へにけるとしを　かそふれは　ふたちとせをも　すきはてゝ　の
ちのいつゝの　もゝとせに　いりにけるこそ　かなしけれ　あはれ
みのりの　水のあわ　きえゆくころに　なりぬれは　それに心を
すましてそ　わか山河に　しつみゆく　心あらそふ　のりの師は
われも〳〵と　あをやきの　いと所せく　みたれきて　花もゝみち
も　ちりゆけは　こすゑあとなき　み山への　みちにまとひて

小侍従

すきなから　ひとり心を　とゝむるに　かひもなきさの
しかのうら　あとたれましゝ　日よしのや　神のめくみを
たのめとも　人のねかひを　みつ河の　なかれもあさく
なりぬへし　峯のひしりの　すみかさへ　こけのしたにそ
むもれゆく　うちはらふへき　人も我　あなうの花の　世中や
春のゆめゝは　むなしくて　秋のこすゑを　思ふより　冬の雪とも
たれかとふ　かくてや今は　あとたえん　とおもふからに
くれはとり　あやしき夜の　わかおもひ　きえぬ許を　たのみきて
猶さりともと　おもひつゝ　しはし宮こに　やすらひて　のころ
みのりの　花のかに　しひて心を　つくは山　しけきなけきの　ね
をたつね　しつむゝかしの　たまをとひ　すくふ心を　ふかくして
つとめゆくこそ　あはれなれ　み山のかねを　つく〳〵と　わ
かさみかよを　おもふにも　峯の松風　のとかにて　ちよにちよとせ
を　そふるほと　のりのむしろの　花の色　野にも山にも　にほひ
てそ　人をわたさん　はしとして　しはし心を　やすむへき　つゐ
にはいかゝ　あすかゝは　あすよりのちや　わかたちし　そまのた
つきの　ひゝきより　峯の朝きり　はれのきて　くもらぬそらに
たちかへるへき

反哥

さりともと思ふ心を猶ふかき　たえてたえゆく山河の水　（二五九六）

返し

久方の　あめつちともに　かさりなき　あまつひつきを　ちかひを
きし　神もろともに　まもれとて　わかたつ杣と　いのりつゝ　昔
の人の　しめてける　峯の杉村　いろかへす　いくとし〳〵を　へ
たつとも　やへの白雲　なかめやる　みやこのほるを　となりにて
みのりの花も　おとろへす　にほひむ物と　思をきし　すゑはの
露も　さためなき　かやかしたはに　みたれつゝ　本の心の　それ
ならぬ　うき ふしこけき　くれ竹に　なくねをたつる　うくひすの
ふるすは雲に　あらしつゝ　あとたえぬへき　谷かくれ　こりつ
むなけき　しゐしはの　しゐて昔に　かへされぬ　くすのうらはゝ
うらむとも　君はみかさの　山たかみ　くもゐのそらに　まとり
つゝ　てる日をよゝに　たすけこし　ほしのやとりを　ふりすてゝ
ひとりいてたし　わしの山　世にもまれなる　あとゝめて　ふか
きなかれに　むすふてふ　のりのし水の　そこすみて　にこれるよ
にも　にごりなし　ぬまのあしまに　かけやとす　秋の半の　月な
れは　猶山のはを　ゆきめくり　そらふく風を　あふきても　むな
しくなきぬ　ゆくすゑと　みつの河波　たちかへり　心のやみを
はらくへき　日よしのみかけ　のとかにて　君をいのらん　よろつ
世に　ちよをかさねて　松かえを　つはさにならす　つるのゝこの
ゆつるよはひは　わかのうらや　今もたまもを　かさつめて　ため
しも渡に　みかさをく　わかみちさても　たえすは　ことのはゝ
との　いろ〳〵に　のち見む人も　こひさらめかも　二五九七
きみをいのる心ふかくはたのむ覽たえてはさらに山河の水

建保五年五月御堂にて三首

寄山朝

けさそこの山のかひあるみむろ山たえぬ道のあとをたつねて　二五九八

寄海暮

しき波のたゝまくおしきまとゐしてくるゝもしらぬわかのうら人　二五九九

承久三年八月新院よりしのびてめされし閑中暁月　二六〇〇

春秋ものとけき宿におしめはや山のはとをき在明の月

御空にて上陽人を　二六〇一

秋の月むなしき軒のいくめぐりよそに出にし雲の上かな

承久二年二月十三日内裏に弄請とらるべきよしもよほされしかは母の遠忠にあたれるよし申て思ひよろこびしにその日のゆふかたにはかに忌日をはゝからすまいるべきよし歳人大輔家光三たびよみつかはしたりしかはかきつけてもらてまゐりたりし二首　春山月　二六〇二

さやかにもみるへき山は霞つゝ我身のほかも春の夜の月

野外柳　二六〇三

道のへの野原の柳下もえぬあはれなけきの煙くらへに

同年九月十三夜前大僧正の御もとにたてまつる　二六〇四

ありてうき命はかりは長月の月を今夜ととふ人もなし

面影におほくの今夜しのふれと月と君とそかたみ成ける　二六〇五

なにかせむ昔こひしき老か世はたへて見るへき月にしあらねは　二六〇六

秋をへてくやしき月になれにけりはてうき末の世にやとり来て　二六〇七

里わかす身をはかりてしたひみし月もや今は思ひすつらん　二六〇八

今はとて思はてつる袖の上をありしより けにやとろ月かな　二六〇九

行末の月と花とに情ありて此比よりは人やしのはん　二六一〇

我宿とうへし木のまの月にたに住はてかたき世をも聞かな　二六一一

哀猶今さへいたくなからへていかなる秋の月かみるへき　二六一二

今年まて身にあまりぬる思ひいては君にうれへて月をみる哉　二六一三

返し

長月の月は今夜の雲の上になかむとこそは思ひやりつれ　(二六〇四)

うき身猶月にならひてかたみならは返して君を思ひしる哉　(二六〇五)

吹はらふ山のあらしをまてしはししはしそ月は雲かくるとも　(二六〇六)

くたりはつる世の行末はならひぜのほらは峯に月もすみなむ　(二六〇七)

月影の人にやとらぬ世とならはしはしもいかゝ在明の月　(二六〇八)

いかさまにいさとよ月はてらすともすみはてつへき人はひとかは　(二六〇九)

われれもさそ今行末をとはゝ月のこたへはいかゝうれしからまし　(二六一〇)

誰にいはむおもへはかなしもろともになからへん跡の月のかたみに　(二六一一)

世中をかみにうれへて見る月に思ふ心は今やはるらむ　(二六一二)

はてこ又はしまる世とやてらすらむさらはたのもし秋の夜の月　(二六一三)

無常

ささらさのころ母のおもひになり侍しとふらふとて大輔

つねならぬ世はうき物といひくてけにかなしきを今やしるらん　(二六一四)

返し

かなしさはひとかたならす今そしるとにもかくにもさためなきよを　二六一四

新古春霞　おなし三月尽日大将殿より　(二六一五)

かすみしそらのなこりゝへけふをかきりの別なりけり

御返し

わかれにし身のゆふくれにくも消てなへてのはるは限はてしき　二六一五

おなし年五月になりて三位季経卿

はかなさをわすれぬほとをしるやとて月日をへてもおとろかす哉　(二六一六)

返し

月日へてしつまるほとのなけきにそこと〻ふ人のなさけをもしる　二六一六

新古

たまゆらのつゆもなみたもとゝまらすなき人こふるやとの秋風　秋のわきせし日五条へまかりてかへるとて　二六一七

返し　入道殿

秋になり風のすゝしくかはるにもなみたのつゆそしのにちりける　(二六一七)

三位中将なくなりての秋はゝのおもひにてこもりゐたる九月

尽日山座主にたてまつる

はつしもよなれのみ時はわさかほに人はかをへぬ秋のくれかは　二六一八

みそちあまりふたとせへぬる秋のしもまことに袖のしたとおるまて　二六一九

ふりまさるわかよのあらしよわるらし袖までもろき秋のくれ哉　二六二〇

みし人のなきかすまさる秋のくれわかれなれたる心ちこそせね　二六二一

霞まてとはれし人はまかひにきむなしき秋のくれのしらくも　二六二二

あけくれてこれもむかしになりぬへし我のみもとの秋とおしめと　二六二三

とはぬ人なれつる秋のつゆ嵐あとたしかなる庭の浅ちふ　二六二四

ねかはるゝおもひのすゑも風寒く谷のとほそも秋やいぬらむ　二六二五

またさめすよしなきゆめの秋哉心の秋を秋にあはせて　二六二六

を山田のつゆのかりいほのやとり哉君をたのまむいなつまのゝち　二六二七

御返し

くれの秋をかそへてしるほかひもなししるしありけり庭のはつしも　(二六一八)

したとおるそてにてきみも思しれよそちかさぬる霜のたもとを　(二六一九)

わか秋のふくれは冬の山をろしつよく身にしむ暁のそら　(二六二〇)

人の世の霜に時雨をそめかへてわかれなれたる心ちこそすれ　(二六二一)

ふる衣をめけんはろの霞よりそてしも秋のくれのしら露　(二六二二)

思いつるきのふの秋は昔にて此ころ思ふ行末のはる　(二六二三)

わかやとはけさこそいとゝ哀なれ秋にをくるゝ庭をなかめて　(二六二四)

君はさは思しらてやたとる覧ねかふすみかそ秋のとなりも　(二六二五)

ひとりのみ夜もあけやらぬ秋のゆめのさは又さめぬ君もありけり　(二六二六)

秋も冬もなかめはかりは君をのみたのむのかりを月にまかせて　(二六二七の一)

ことのはにむすふ契りはみえぬれとたのめといかゝいはしろの松　(二六二七の二)

おなし日女院の天輔に

とゝまらぬ秋のわかれのかすかすにみなれし人のなきそおほかる　二六二八

返し

つくづくとひとりなかめて思いつる心の内をきみもしりけり　(二六二八)

おなしことしの雪のあしたに大将殿より

白妙のと山の雪をなかめてもまついろおもふ君か袖哉　(二六二九)

人のよは思なれたるわかれにて朝日にむかふ雪のあけほの　(二六三〇)

いかに居思やるらむこけのしたをいくへ山ちの雪理むらむ　(二六三一)

またさめぬさのふの夢の袖の上にたえすむすへる雪のしたみ　(二六三二)

猶のこれあけゆくそらの雪のいろこのよのほかの後のなかめに　(二六三三)

御返し

衣手にはてなき涙まつくれてかはるとも山の雪をたにみす　二六二九

ゆきつもりふりゆくかたそあはれなる思なれたるわかれなれとも　二六三〇

おなしせになれしすかたはへたらりてゆきつむこけの下をしたしき　二六三一

こそはみぬきのふのゆめのかすをひてさくらにゝたるのきの雪哉　二六三二

心もてこのよのほかをとをしとていはやのおくの雪をみぬ哉　二六三三

建久元年二月十六日西行上人身まかりにけるをはりみたれ

さりけるよしきこて三位中将のもとへ

もち月のころはたかはぬそちなれと消けん雲のゆくゑかなしな　二六三四

上人先年詠云ねかはくは花のしたにてはるしなむそのきさら

きのもち月のころ今年十六日望日也

返し

紫の色ときくにそなくさむるさえけんくもはかなしけれとも

（二六三四）

鼓摂政殿にはかに夢の心ちせし御ことのあくる日宮内卿とふらひつかはしたりし返事のついでに

昨日までかけとだのみしさくら花ひと夜のゆめのはるの山かせ

返し

かなしさの昨日のゆめにくらふれはうつろふ花もけふの山かせ

（二六三五）

そのこち日かすへて又あれより

さくら花こふともしらしかけろふのもゆる春日になく〳〵そふる

（二六三六）

春の夜のおほろ月よもおほろけの夢とも見えぬ花の俤

（二六三七）

なく涙このめもかれしはるの夢にぬるゝたもとは君もかはかし

（二六三八）

ふしてこひおきてもまとふはるのゆめいつかおもひのさめむとすらむ

（二六三九）

思やるこけのしたこそかなしけれかすみのたにのはるの夕くれ

（二六四〇）

あふさみしかりのかすみにさえしより むなしくゝるゝ春のそら哉

（二六四一）

かりそめのやとにせきいれし池水に山もうつりてかけをこふらし

（二六四二）

いつまてかたれもいくたのもりのつゆきえにしあとを恋つゝもへん

（二六四三）

たまきはるいのちはたれもなきものをわすれね心思返して

（二六四四）

きえぬへしみれはなみたのたきつせにうたかた人にあとをこひつゝ

（二六四五）

返し

こひわふる花のすかたはかけろふのもえしけふりをむねにたきつゝ

（二六三六）

せきもあへぬ涙のとかゝくもれ月霞したしきそらとたのまむ

（二六三七）

紅の涙ふりいてしはるさめにあらし身をしる袖のたくひは

（二六三八）

ゆめならてあふよもいまはしら露のをくとはわかれぬとはまたれて

（二六三九）

うつもれぬたまのこゑのみとまりゐてしたひかねたるこけのした哉

（二六四〇）

かすみにしうき物からのはるのそらくるれはかなしそれもかたみと

（二六四一）

山の色はせきいれし水にうつるとも恋しきかけをいつかみるへき

（二六四二）

春の夢あかきりにきしゆふへよりいくたのもりの秋もうらめし

（二六四三）

世々ふともわすれし心たまきはるあたの命に身こそかはらめ

（二六四四）

いまはたゝわか身ひとつの思河うたかた消てたきつしらなみ

（二六四五）

おなしころ人のとふらへりし返し

道かはるけふりのはてはたそはて夢ならねはそあけくらす覽

（二六四六）

みしもうきかはらぬ夢をかつきけとわか心にはためしたになし

（二六四七）

みかさ山あふさしみちもたのまれす世のことはりにまと心は

（二六四八）

みぬ人もしらぬも涙かゝる世になれてそむかぬ袖のつれなさ

（二六四九）

おもかけはまたかきりともたとられすいとしも人のしつのをたまき

（二六五〇）

世中はうきにあふさの秋はてぬなにの別のわすれかたみそ

（二六五一）

さきたてゝしのふへしとはしらさりき思ひおもひのほかの涙を

（二六五二）

あさつゆにぬれてのゝちの世もしらす夜にそめぬ色そかなしき

（二六五三）

おなし年の夏ころの事にや人に

わかをむる たもとの色のひまも哉それゆへふかきことのはもみむ

（二六五四）

なくは世にしのはれんとはみし人をくゝる身こそ思にはにね

（二六五五）

あけくれもおほえぬ月日へたゝりてそれかのくものそちもたのます

（二六五六）

おもひさやまちしやよひの花の色に花たちはなのよすか許と

（二六五七）

あたにみし花のことやはつねならぬうき春風はめくりあふとも

（二六五八）

よろのつるの心のいかにとまりけん衣の色にたれもなくねを

（二六五九）

おもひかねひとりなこりをたつねつゝそのよにもにぬやとをみし哉

（二六六〇）

うたかひてうへし梢はあおはにて人めは庭のよをにかれにき

（二六六一）

日をさしていそきし池の花の舟みくさのなかにうき世なりけり

（二六六二）

おもひ河あはれうき世のまさりつゝいか許なる涙とかしる

（二六六三）

又のとし三月七日かもに御寺侍しつさの日大僧正十首御寄
の返し

うきなから昨日はそ仏もしのは仏きまたしらさりしこそのあけほの　二六六四
けさはいとゝ涙そ袖にふりまさるきのふもすきぬこそも昔と　二六六五
をくれてはやすくすきける月我したひしみちはゆくすもなし　二六六六
おほかたはたゝあけぬよの心地してしらすことしのさのふけふとも　二六六七
わすられぬいのちのかぎりなけさしてつらきはもとのなさけなりけ
り

とをさかる月日のうさをかそへても面かけのみそいとゝけちかき　二六六八
たのまれぬ夢てふ物のうき世には恋しき人のえやはみえける　二六六九
うかりけるやよひの花のちきり我ゝるをや人はならひなれとも　二六七〇
神に猶君をいのりしさかきはのかけにもみえし玉かつら我　二六七一
いはへともわかためつゆをこほれそふ藤のさかりを松はよりつゝ　二六七二
建永元年七月和寺所当座
寄風懐旧

月日へて秋のこの葉をふく風にやよひのゆめそいとゝよりゆく　二六七四
雨中無常

よそふれはかさねてもろき末の露身をしる袖のうへのむら雨　二六七五
六条三位家衡卿人にをくれてなけくときゝて申をくりし

とゝむてふしからみもなさわかれちの秋の涙を何にせくらむ　二六七六
なさわたるよさむの風のいかならむとこよはなれしかりのつはさに　二六七七
返し

せく袖もなく〳〵こそはあかしつれむなしきとこの秋の此比　(二六七六)
とはれてもとこよはなれしかりかねの秋の別はかなしかりけり　(二六七七)
承元四年三月七日左大将殿へ

をくれしとしたひし月日うきなからけふもつれなくめくりあひつゝ　二六七八
返し　大将殿

かすみにしけふの月日をへたてゝも猶佛のたちそはなれぬ　(二六七八)
入道寂蓮みまかりぬときゝて雅経少将のもとへ

たまきはる世のことはりもたとられす猶ゝらめしきすみよしの神　二六七九
返し

かきりあれはうらみても又いかゝせむかゝるうき世に住吉のかみ　(二六七九)
承久元年六月故女院御忌日蓮華心院にまいりて思い
つることもおほくてまいられたりし女房の中に

おいらくのつらきわかれはかすそひて昔みし世の人のすくなき　二六八〇
おしむへき人はみしかき玉のをにうき身ひとつのなかさよの夢　二六八一
けふことにくさはのつゆをふみわけてあとなきゝみのあとそかなし
き

今よりのけふこむ人をかそへつゝこれやなこりのかたみなりける
つきの日

おいらくの思ひをゝらにしられにしうきをかさねしいにしへの夢　二六八四
思さやと許はみし年々もことしをしらぬうらみなりけり　二六八五
しらさりきたれもえしらしいにしへやあとなき君かあとをみむとは　二六八六
しのふへきけふこむ人のそのかすにのこるへしとはおもはさりしを　二六八七
老老籠居のゝち秋ころ母の思ひなる人に

かはりにしたもとの色もいかならん時雨はてぬるよもの梢に　二六八八
いか許秋の夜すからしのふらむひさしきはてのさらぬ別を　二六八九
つゆしくれ袖にこりをしのへとや秋をかたみのわかれなりけん　二六九〇
かたみとていくかもあらぬ秋の日にうつろひまさる白菊の花　二六九一
なき人をこふる涙やきおふらむおつるこのはにあらしたつころ　二六九二

霜のたて山の錦の衣をへてはともなふ虫やよはりはつらむ　二六九三
思やる枕の霜もさえはてゝ宮このゆめもあらしこそふけ　二六九四
さためなくしくるゝ雲のゆきゝにもそなたのそらをわすれやはする　二六九五
大かたの身をしる袖にをきそへて猶色ふかき秋のつゆ哉　二六九六
ふるさとの時雨につけてことつてよひとかたならす思やるとは　二六九七
女院かくれさせおはしまして典侍世をそむきにしころとふら
ひつかはして兵部宮内卿
花のいろもうきよにかふる黒染の袖や涙に猶しつくらむ　（二六九八）
返し
すみそめを花の衣にたちかへしなみたの色はあはれともみゝ　二六九八

神祇

新古　後京極摂政殿伊勢勅使時外宮にまいりて
ちきりありてけふ宮河のゆふかつらなかき世までもかけてたのまむ　二六九九
むかし八幡の哥合とて人のよませ侍し社頭述懐
たのむ哉くもゐにほしをいたゝきてわかすみかてふもとのちかひを　二七〇〇
住吉并依羅社に求子の哥よみてたてまつるへきよし祠官申しかはたてまつりし
続後　住吉の松かねあらふしきなみにいのるみかけはらよもかはらし　二七〇一
きみか世はよさみのもりのとことはに松とすきとやちたひさかえん　二七〇二
承元二年の秋分将具親三社にてうた講すへきよし申し中
に住吉
つれもなく猶すみの江にたむけ草ひきすてらるゝ道のくちはを　二七〇三
かきつめし松のしたに波いろわかぬもくつなりけり身さへくちぬる　二七〇四

広田

あはれひをひろたのはまにいのりても今はかひなき身の思ひ哉　二七〇五
あまのすむさとのしるへのいくとせにわれからたへてみるめなりけり　二七〇六
ことはりと思しことを北野にいのり申とて
続後　ちはやふる神のきたのにあとたれてのちさへかゝる物やおもはむ　二七〇七
そのことはかりしるしあらたになむ侍ける
日吉社にこもりて思つゞけゝる事のなかに
みし夢のすゑたのもしくあふ事に心よはらぬ物思ひ哉　二七〇八
うしとよをみとせはすきのうれへつゝかくて嵐に身やましりなむ　二七〇九
かをへやるほとやなけきをいのりけん神にまかせてねをそなきつる　二七一〇
すてはつなちきりあれはそたのみけむ神のなかにも人のなかにも　二七一一
承久元年九月日吉哥合とて内よりのおほせことにて六首の
中　社頭松風
たのみこしるしもみつの河よとに今さへ松の風をひさしき　二七一二
湖上眺望
にほの海のあさなゆなにかなかめしてよろへなきさの名にやくちなむ　二七一三
御熊野詣の御共にまいりて哥つかうまつりし中に
本宮
寄社祝
ちはやふる人まのゝ宮のなきの葉をかはらぬ千世のためしにそおる　二七一四
河千鳥
さゝ千鳥やちよと神やをしふらんきよきかはらに君いのる也　二七一五
山家月
み山木のかけよりほかに人まもなしあらしにすてしかいほの月　二七一六

新宮

海辺残月

わたつうみもひとつにみゆるあまのとのあくるもわかすゝめる月影　二七一七

庾上冬菊

霜をかぬ南のうみのはまひさしひさしくのこる秋のしらきく　二七一八

暁聞竹風

あけぬるか竹のは風のよしなからまつこのさみのちよをきこゆる　二七一九

那智

深山風

風のをとともたゝぜのつねにふかはこそみ山いてゝのかたみにもせめ　二七二〇

瀧間月

やはらくるひかりそふらしたきのいとの夜ともみえすやとる月かけ　二七二一

寺落葉

てらふかきもみちの色にあとたえてから紅をはらふこからし　二七二二

本宮にて又講せられ侍し遠近落葉

こけむしろみとりにかふるから錦ひとはのこさぬをちのこからし　二七二三

暮聞河波

もろ人の心のそこもにこらしなゝにすめる河波のこゑ　二七二四

道のほとの哥　山路月

袖の霜にかけうちはらふみ山ちもまた末とをきゝゝつくよ哉　二七二五

暁初雪

冬もけさことしの雪をいそきけりよをこめてたつ峯のあけくれ　二七二六

深山紅葉

み山ちはもみちもふかき心あれやあらしのよそにみゆさまちける　二七二七

海辺冬月

くもりなきはまのまさこにきみかよのかすさへみゆる冬の月かけ　二七二八

河辺落葉

そめし秋とくれぬとたれかいはた河また浪こゆる山ひめのそて　二七二九

旅宿冬月

いは浪のひゝきはいそくたひのいほをしつかにすくる冬の月かけ　二七三〇

羇中霰

冬の日をあられふりはへあさたては浪に浪こすさのゝ松風　二七三一

夕神楽

神かきやけふのそらさへゆふかけてみむろの山のさか木はのこゑ　二七三二

釈教

後法性寺入道関白殿舎利講に詩哥結縁あるへしと

て十如是の心を相

あともなくむなしきそらにたなひけと雲のかたちはひとつならぬを　二七三三

性

にこり江やを河の水にしつめともまことはおなし山のはの月　二七三四

躰

かりそめにつるの林の名をたてしけふりのゝちのすかたをそみる　二七三五

力

みなれさほいはまになみはらかへともたゆますのほるうちの川舟　二七三六

作

春の田に心をつくる山かつもうふるさなへそ色にいてける　二七三七

因

たねまきし春をわすれぬつまなれや垣ほにしのふやまとなてしこ　二七三八

縁

年をへて子日になるゝひめこ松ひくにそちよのかけもみえける　二七三九

果

袖のかをよそへてうへしたち花もあさをくしもに身をむすふまて　二七四〇

報

しらぬよを思ふもつらさめのまへに又なけきつむのちのけふりよ　二七四一

本末究竟等

あさちふやましる蓬のすゑ葉までもとの心のかはりやはする　二七四二

人のよまと侍し化城喩品哥

かりのやとにたとふるのりをあふけともしはしやすめぬ身のうれへ　二七四三

戒

報恩会五百弟子品

こひしとてこかるゝ色もあらしふくはゝそかはらに人もやとらて　二七四四

同会人記品

もろともに思そめける紫のゆかりの色もけふをしらるゝ　二七四五

大輔勧住吉一品経法師品

たつねゆくし水にちかきみちそこれみのりの花の露のしたかけ　二七四六

報恩会提婆品

続百

わたつ海のそこのたまもにやとかりてみなみのそらをてらす月かけ　二七四七

報恩会勧持品

きりはれてゆくすゑてらす月かけをよもさらしなと何なかめけん　二七四八

涌出品

いかにしてはつねはわかき鶯のふるき野山の春をつけゝむ　二七四九

分別功徳品

とふとりのあすか河風それもかと袖ふきかへし花をふりしく　二七五〇

嘱累品

みたひなつるわかくろかみの末までもゆつるみのりをなかくたもたむ　二七五一

七文十三年の忌日に遺言に侍しかはうたよむ人々すゝめて

結縁経供養し侍しに　厳王品

この道をしるへとたのむあとしあらはまよひしやみもけふははろけよ　二七五二

律師歌円すゝめし法華経

普賢品哥

こち風にちりしく花もにほひきてわしのみ山のあるしをそとふ　二七五三

母の周忌に法華経六部みつからかきたてまつりて供養せし一部のへうしに表にかゝせし哥

一巻

あはれしれはるのそなたをさす光わか身につらきさらきのそら　二七五四

二局

おしますよあけほのかすむ花のかけこれも思ひのしたのふる郷　二七五五

三局

郭公たつぬる峯もまとはましかりねやすむるしるへならすは　二七五六

四局

身をしほる山井のし水をとろかしさきたつ人に風やすゝしき　二七五七

五局

をみなへしうけゝる玉のあとしあれはきえしうほゝに露なみたれそ　二七五八

六局

てらさなん世々もかさらぬ秋の月いる山のはにひかりかくさて　二七五九

七局

むかはれよこのはしくれし冬の夜をはくゝみたてし埋火のもと　二七六〇

八局

歴劫の弘誓の海に舟わたせ生死の波は冬あらくとも　二七六一

無量義経

たのもしなひかりさしそふさかつきを世をてらすへきはしめとやみぬ　二七六二

普賢経

あさひかけおもへはおなしよるの夢わかれにしほるしのゝめのつゆ　二七六三

心経

むなしさをみよのほとけのはゝならは心のやみをそらにはるけよ　二七六四

無量義経の心を人のよませしに

わたしもりいたすふなちはほともめらし身は此きしにきりはれすとも　二七六五

住江殿にて供養すへしとて人のすゝめ侍し解脱房のためとて法華経人意

のりの花さくのあさつゆやとりきてもらすかひなき光をそまつ　二七六六

海路懐旧

かへりみはゆくかたしたふしるへせよ南の海のふかきちかひに　二七六七

舎利讃歎のこゝろ

きえせすなつるの林のけふりにものこすひかりのつゆのかたみは　二七六八

金光明最勝王経王法正論四哥国内居人盛蒙利益

よもの海夜わたる月にとさしせてくもりなきよのみかけをそしる　二七六九

なき人の名をゝのくとりて平都婆にやうすとて人のすゝめしうた

磐姫皇后

くろかみのなかきやみちもあけぬらんときまよふしものきゆるあさひに　二七七〇

二条后

春かけてなくとりのねに雪消てひかりをそへよあけはのゝそら　二七七一

高津内親王

木にもあらぬ竹のしたねのうきふしにむなしきよゝをまつやさとらん　二七七二

斎宮女御

さそはなんかよひしことのねとそへてむかふるにしの峯の松風　二七七三

広幡御息所

うつしをくはちすのうへにみかゝなんかきほにさけるなてしこの露　二七七四

在原中納言

もしほたれなけきをすまの道かへてうき世ふきこせきのうら風　二七七五

小野宰相

なく涙わかれは雨とふりぬともまことのみちにかへれとそ思　二七七六

衣通王

紫のくもまにけふやむかふらんまちにはまたぬ心かよはゝ　二七七七

大伴坂上郎女

心うきさとゝしりにしこひなれは輪廻の霞いまやはるらん　二七七八

中務

しのふらんなみたにくもるかけなからさやかにてらせありあけの月　二七七九

支治の比敦富門院大輔天王寺にて十首哥よみ侍しに　非釈教題依追書入在奥

月前念仏

西をおもふなみたにそへてひくたまに光あらはす秋のよの月　二七八〇

草庵忘帰

とまりなんくるれはやとろつゆのまもをき所なき身はかくれけり　二七八一

暁天懐旧

しらさりつ身は在明のつきもせす昔になしてしのふへしとも　二七八二

薄暮観身

きえはてむ煙のはてとなかむれと猶あともなき夕くれのくも　二七八三

旅宿浪声

おとろかし夢の枕による浪もこゑこそかはれ袖はなれにき　二七八四

船中述懐

あさなきのふなてにたにもわすれはやくかにしつめる秋の心を　二七八五

厳離猿土

にこり江に猶しもしつむ芦のねの厳よしのみしけきころ哉　二七八六

飲水浄土

思哉さきとる色をなかめてもさとりひらけん花のうてなを　二七八七

掬亀井水言志

もろ人のむすふ契りはわするなよかめ井の水にこうはへぬとも　二七八八

於難波精舎即事

ふきはらへ心のちりもなにはかたさよきなきさのゝりのうら風　二七八九

遁世のよしきて家長朝臣

すみそめの袖のかさねてかなしきはそむくにそへてそむく世中　（二七九〇）

返し

いける世にそむくのみこそうれしけれあすともまたぬおいのいのち　二七九〇

は

おなし時捨案入道

君かいろまことのみちの月のかけゆめとみし世をいまやてらさん　（二七九一）

返し

やみふかきうきよのゆめのさめぬとてはらさはうれしありあけの月　二七九一

兼日蒙仰拾遺愚草　三帖　以伝来之

証本令書写献之

延享三年八月二十日右兵衛督　藤原為村